

翁助存稿

その他
の資料

昭和三年一月

特別
14
1919
775



特

門 14
號 1919
卷 41

~~門 15
號 1880
卷 41~~

775

昭和十六年十一月
市島謙吉
贈



吾等所評ニ就テ
 ミルトンと海軍の比較ニ就テ曰ク西人ミルト
 ンと比シセリリスロヤを海ニ比シてある。
 評し得てぬと思ふ。

又曰今の批評家は極しぬ人を何等かの型ニ箱
 めてそれから評論する。評するものもこんがらま
 法もあるゆゑとも、目誤れることが多い。人間は
 どの型にも箱さう並ぶるものがある。それを
 箱に箱めするの無理の沙汰也。
 又曰獨乙かぶんの評論家は先づイダムを主として、
 之れを人度として、評論するが、こんがらま
 入隔りやうい。自合ハイダムを好まうもの。

又曰或ハ自然を慈母れと云ふ。よのがある。吾ら自然
す自れハ残日融れと云ふ。よのあらず。皆一南と云ふ
る。過(過)きさる。自然ハまの何んもあらずと云ふ
を得べく。亦其の何んもあらずと云ふ。こも出来ぬ
自知を論ずる。志かく単純であつてはる
との

◎近松とゲーテ
 道彦曰く、近松門左衛門は芝居の味は虚と實との間に在りと謂つたと云ふが、これは恰かもゲーテが詩味はトルース(真)とアントルースの「Liesbet」の處に存すと謂つたのと同じとて、東西の名人は期せずして同じことを謂つて居る。

◎人形と人情
 或る人近松に向つて貴君の作の中には女から男に口説きかける處が往々見へるがあれは女として餘りあつかましくはないか、成る程情は女の方が盛んであるに相違ないが、男に先んじて女の口から之をあらはすと云ふことはない一本きめ込むと、近松の答へるには、それは其通りであるが、全体芝居の目的は觀者に感動を與へるが主であるから、女から口説き出さうが男から口説き出さうが、感動を覺えさへすればよいのであつて、必ずしも實際と同じでなければならぬと云ふ道理はない、實に虚の混する處が即ち芝居と實際が異なる所だと謂つた。これに就て道彦の言ふには、如何にも近松の説の如くである、當時の芝居は役者が道るのでなく人形が遣るのであるから、どうしても活動を能ふるため不自然ながら女の人形をして男に先んじて情の發現を爲さしめざるを得なかつたのであらう、活動をさせる人形が黙して居つた日には一向人情が移らないであらう。

◎舞臺で泣くべきか
 余は道彦に問ふて曰く、俳優は舞臺の上で泣くものか又泣くを可とするか泣かざるを可とするか。道彦曰く、此問題を初めて研究した者は佛國革命頃の人で、ジテロである、近年アーチャーと云ふ人は熱心此事を研究し、實際の統計を得んとて、書を多くの名優に寄せて各個の経験を徴した處、泣くものと泣かざるものと相半ばしたと云ふことであるが、現今美學者の説では、泣くを不可とするに歸した様であると云ふ。成る程美を忘我と爲す以上は、我を思ひ出さしむる實感を避けなければならぬ道理である。道彦又曰く、日本の名優で泣ければ泣いたのは菊五郎で、餘り泣かなかつたのは團十郎である。俳優も進歩の徑路中には實感を起して一たびは泣かなければ藝が上達しない、併し藝が熟して十分の餘地を有する様になつたらば、夢の意識でゆかなければ本當の妙とは言ひない。

◎篁村と道彦
 余又問ふて、小説家自身大いに感動し落泪したるの時のせし作は果して名文なるや。道彦曰く、必ずしも然らず、嘗て篁村(實村翁)より短篇の小説を示されたることがある。篁村自身はこれを書くに非常の感慨を起し、眞に涙を以て書いたと云ふて居る、わざと僕に示した處を以つて見れば、得意の作に違ひない。自分が泣いて書いたから人も泣くたらうと思つたであらうが、讀んで見ても一向感じなかつた。作家はいろ／＼の事情で泣くので、作家自身も實は其の原因がわからぬのであるから、いくら涙を以つて書いたと云ふても、其作が人を感動させるとは限らないわけだ。演説家などで

も、演説家自身泣いて居つても、其割に感動を痛切に感ぜしめないことがいくらかある、亦演説家自身泣いては言語の明瞭を缺くから、却つて感動を害することになる。
 ◎悲哀と滑稽
 悲哀は人に共通する情である、故に甲の時代に於て悲憤とせし事は乙の時代に於ても矢張り悲憤とする、某國に於て悲哀とする所は他の一國に於ても亦悲哀である。然るに之れに反して滑稽はそうではない、一時代に於ける滑稽は他の時代に至れば可笑味を感ぜしめざる事あり、又甲國に於て人を絶倒せしむるに足るの滑稽も、乙國に至れば毫も人を笑はしむるの力を有せざる事がある。要するに滑稽は共通的の性質を有つて居らない、而して何故に然るや未だ解決を得ざる一問題である。

走馬登
 譯者 主人
 ◎落語は紋切形
 今日寄席に落語家が紋切形の滑稽話をして、聴衆の喝采を博し得ぬのも道理である。何となれば其滑稽は文化文政の滑稽、前世紀の滑稽であるからである。文壇に於て僅かに滑稽の殘響を維持するものは、篁村(實村)得知(幸堂)の徒であるが、これとても漸く今日の讀者に解せられざらんとして居る。蓋し渠等も亦文化文政の滑稽系統を傳へたもので、二十世紀の滑稽でないからである。
 ◎滑稽拂底の世
 二十世紀には二十世紀の滑稽がなくてはならぬ、日本には日本的の滑稽が必要で

ある。しかも一十世紀は滑
稽拂底の天地である。昔に日
本に於て滑稽なきのみならず、世界何れ
の處へ行くも特にあげつらふ程の滑稽を
見ない。これ畢竟するに前世紀より引き
つゞき人類が生活の争闘に忙はしく、斯
る餘地を有せざるに基くのである。全体
いづれの歴史を繙き見ても、滑稽の大家
の輩出する時は、文學技藝其の
極致に達した時である。英に於
ても佛に於てもそうである、亦日本に於
ても三馬一九の起りし時は、日本に於け
る文藝の最頂點に達した時ではないか。
今日、滑稽の索莫たる世界の大勢で
ある、獨り日本のみ不景氣だと謂ふ譯で
はない。今日、若し滑稽の大家出るとせ
ば、それは時勢をまるで知らざるの人か、
さなくば時勢を達観して超然世外に立つ
大見識ある人でなければならぬ。然も後
者はいまだ出るを見ず、前者は僅かに在
り、算村、得知の徒即ちこれである。



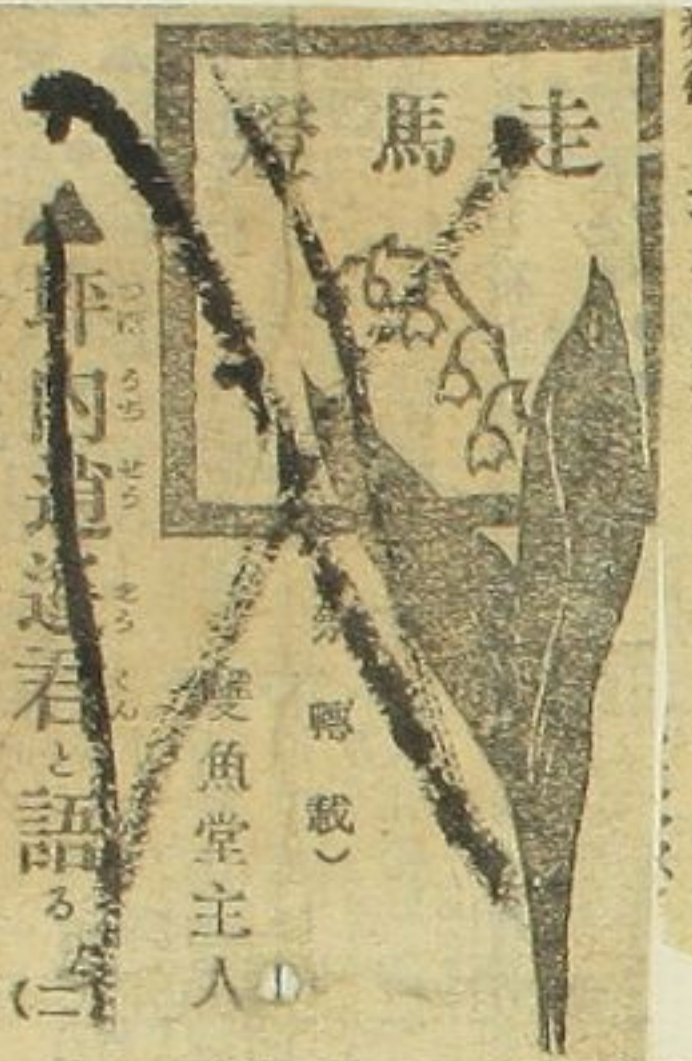
雙魚堂主人
◎耶蘇教文學の癖
耶蘇教文學とも云ふべき一種バイブルの
翻譯から來た文學がある。これは恰かも
外國文を直譯する仕方が、其の則を長崎
の通辭言葉になつたと同じ様に一種の文
体を形づくりに居て、耶蘇教門に入る
と自から此文學に薰陶せられ、不知不識
其人の文章も一種の体をなして來るが、
要するに反譯バイブル體たるを免かれな
い。

一種の文學は實にキザで
ある、例へば收稅吏と書くべきを故らに
貢とりと書くなどいづくの癖がある。
然るに不思議にも此のよからぬ癖が鄭重
に保存せられ、苟も此の門に入ると誰れ

も之れを用ふる様になるが、翻譯バイブル
が中流以上の社會に同情を得ざる所以
は、確かに文章の妙ならざる點に在り。
云はざるを得ない。これが萬葉體
とか或は嚴正の漢文とか左なくも癖
のない時文に書れて居つたならば、
どれほど讀者が多く殖えるか知れん。渠
れが如き書き方では、人を惹く力の無い
のみでなく、寧ろ人をして指彈せしめ忌
避せしむ。いかにもこれは適切な批評

であつて、譯文の可否は直接這般宗教的
書籍の頒布に大關係を有し、延て其宗教
の盛衰にも關係することであるから、布
教に銳意なるものは、宜しく先づ聖經の
良譯を作るに心掛くべきである。
◎一流國と文豪
近年の文界の一大不思議とも
云ふべきは、文明の程度に於て
は寧ろ第一流に位し政體は何
れかと云へば專制君主政治

の邦國に於て、世界を驚かす文豪の續々
輩出することである。例へば露國に於て
近年續々有名な大家の出るのは、一々名
を擧るまでもなからう。亦スカンデナビ
ヤではイブセンの如き名家を出し、波蘭
に於てはプロツフの如き將たブランドス
の如き、又センキウイツチの如きを出し
ハンガリーに於てはヨイカイヤノルダウ
の如きを出し、小説家でも批評家でも寧
ろ第二流國に立派なものを産し、英や佛
や米や其他は却て閑として文界の偉人を
産せざる觀あり、これは實に近年の一大
變徴と云ふて差支なからう。



如きは確かに專制政府の結果であると
云ふてよろしからう。露西亞には言論の自
由がない故に言論を弄せんとするは文
章を藉るより外に手段がない、
恐らく渠れがごとく文豪の續々輩出する
のは、これが爲めであらう。イブセンに
してスカンデナビヤより追放されて伊太
利に往き、其滞伊中に書いた者が尤も名
作として歡迎されて居る、これも必竟政
治上の意味から來たものと云ふてよから
う。其他ハンガリーやポーランドなどに
於ては第一流の人物は力の施し所がない
假令政治的の手腕があつても揮ふに處
がない、寧ろ世界的文豪となる方が比較
的容易であるために、自ら其の方向に趨
るものあらう。亦自國の現狀に奮激して
發するものあらう。それはいろ／＼であ
らうけれども、基づく處は主に政治的原
因にある様思はれる。文學亡國を主
張する論者はこれを目して國が益々衰運に趨
く兆候となすであらう、併しながらこれ
を寧ろ國の漸やく勃興せんとなす

先驅であると解する方が至當だ。
ナゼなれば詩人は預言者で、いつも時勢
に先立ち、將さに來らんとすることを言ふ
ものであるから……
◎小説界の變象
十九世紀に於ける小説界の一
大變象は客觀的のもの變して主觀的とな
つた事である、而して何故に然るかと言
ふに、個人主義の發展其主
たる原因であらう……之れは全く
そうである、個人主義發展の爲め作者の
位置は俄然として高まつて來た、從來詩
の間同様に目された小説家の地位は、已
が説己が主張として聞かせる迄に高まつ
て來た、而して斯の如き變化は現今の日
本のごとく、未だ乳臭を脱せざる書生と
して、知半解の主觀的小説を書かむる
に至つたのである、讀者の迷惑此上なき
と謂はねばなるまい。
◎十九世紀と脚本
又曰く、十九世紀の世界に脚本の傑作

何故に斯る變象が起る乎。それにはいろ
／＼の原因もあるであらうが、露西亞の

が出なかつたのは、主として作者が主観的になつた結果に歸せざるを得ない、何となれば、人各々主張を有し、他人の主張に聞いて居るものは恐らく中流以上に少ないので、主観的脚本の舞臺に上るものは概ね不評を以て失敗して仕舞つた譯である。故に斯る時代に於ては、前世紀の客観的脚本、例へばシークスピヤ物の如きを繰り返すか、然らざれば當世の作中客観的のもの、換言すれば餘り見識張らぬものを選ふ外、仕方がない様になつて来る。之れ十九世紀以來劇壇の實況である。要するに主観的文学の盛んなるときは、乃ち文界群雄割據の時である。銘々勝手に己れか欲する所を言ふて歸着する所を知らざる有様である。然るに

又藝其極致に達し、各種の

料を鍾めて之れを一に歸する事が出来る。此場合に於ては群雄割據の状態は變じて一將統率の形狀となり、隨つて主観的變じて客観的となり、各人はこの客観的文学を歓迎して己まぬ様

になつて来る。即ち外國に於けるソビヤ、我邦に於ける近松馬琴の諸作の如きは、皆な文藝極致の各時代に成り、客観的なる所以である。

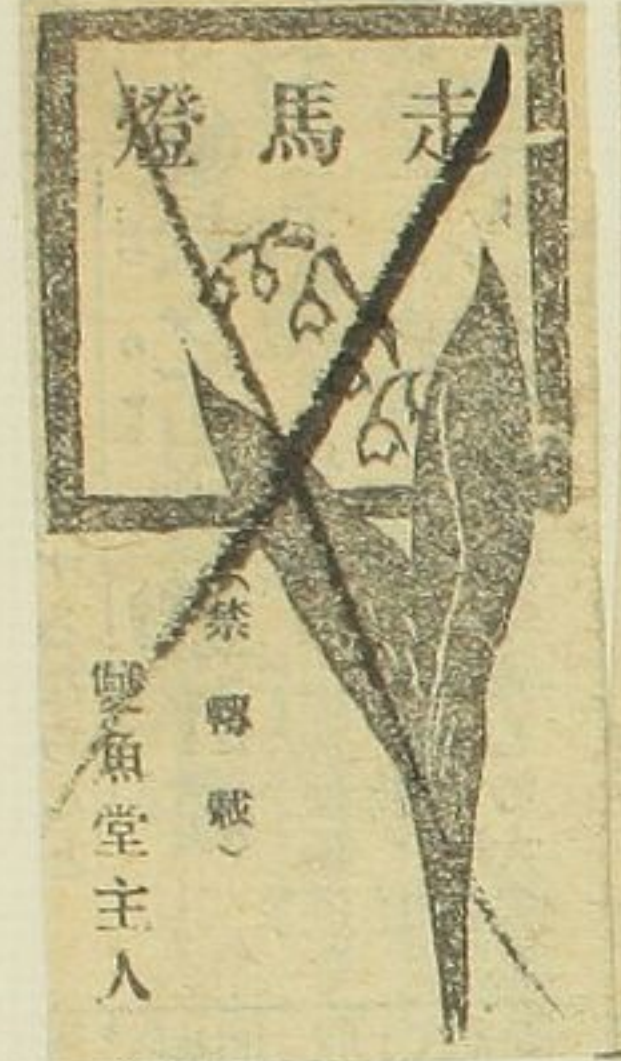


走馬燈 (禁 釋 載) 雙魚堂主人

作家の研究時間

余に問ふて曰く、君は連宵眠られぬことがあるそなたが、そんなときに巧いことが考へつくかネ。曰く、床に這入つて二時間位寝ないでいる。考へて居る内に、自分ながら驚くほどに神が澄んで頭腦が透明になる、悠々なるとなか巧い工夫がつくネ。一例を擧ぐると僕の演劇脚本の桐一葉で、淀君夢の場の趣向……あの金鈴銀鈴を櫻樹に繋ぎ、風

場合であつた。當時逍遙は自作が始めて舞臺に上る大切な時であるから、ひどく神經を起し様々心配して居る、處が其の心配の仕様が流石に詩人的だ。逍遙の言ふには「あの作は豊臣方が主となつて居る、日露に譬ふれば豊臣方を日本として徳川方を露西亞とせなければならん。然るに全体豊臣方は當初非戦論者である、黒書院に於ける且元の論は正しく非戦論であつたのだ、それが終に戦はざるを得ないことに成行き、其の結末がどうかと云へば豊臣方の大敗に歸したのであるから、時節柄其だ面白くない」と云ふて居つた。流石作家は妙な處に氣の付くものである。



走馬燈 (禁 釋 載) 雙魚堂主人

今一つの心配

逍遙の憂ふる所は今一點ある。日露の開戦と云ふごとく混雑の場合に自作を興行させて萬一入が取れないと罪を時節に歸せず學者の作だからと云ふに歸し、ます新作家が萌芽を阻遏せらるゝことになりはせんかと云ふ、これが逍遙の氣遣う要點である、逍遙はこれにつき歎息して云ふには「日本はどうも狭くて困る、戦争が始まるなど云へば國民を擧げて夢中になつて仕舞つて芝居など悠然と見て居るものがない。そこに至ると希臘あたりは流石だ、セラミスの大敗の報が達しても戦死した味方の妻孥はこれには耳を假さず、劇の果るまで誰れ一人席を離れたものがなかつたと云ふが、そうなければ困る」と。文學者は神經過敏の癖に意外な落つき話をするものであると余は傍らに在つて一笑した。

お伽話と教訓

何年程前であつたか、ある日逍遙と相携へて散策の折、例の通り文學談を試みた新報に「アラビアン、ナイト」の反譯が出版になつた廣告が出て居つたに思ひつき談は端しなくアラビアン、ナイトから開かれた、其の云ふには、あの書は確かにお伽話中の傑作だ、恐らく原作を讀んで見たら名文であらう、余曰くあの物語に教訓存するか、否や、曰く存じ居らずと、談は更らに一步を進めお伽物語は教訓を寓すべきものなるや否やに移つた。曰く、お伽物語は或る年輩の兒童に對して、寧ろ教訓を含まぬものが欲しい、即ち七八歳以下の兒童に對しては寧ろ菓子と與へると同じ意味で供給する方が可い、但し七八歳以上の兒童には聊か教訓の意を含有せしめ、は餘り淡泊に過ぎる様だ。勿論教訓の寓方も馬琴のことく餘りに露骨で命令的なのは面白くない、書き方によりては陰微の間に教訓

お伽話と教訓

を寫すことが出来る、自分の望む所は斯う云ふ御書がある。あつた。



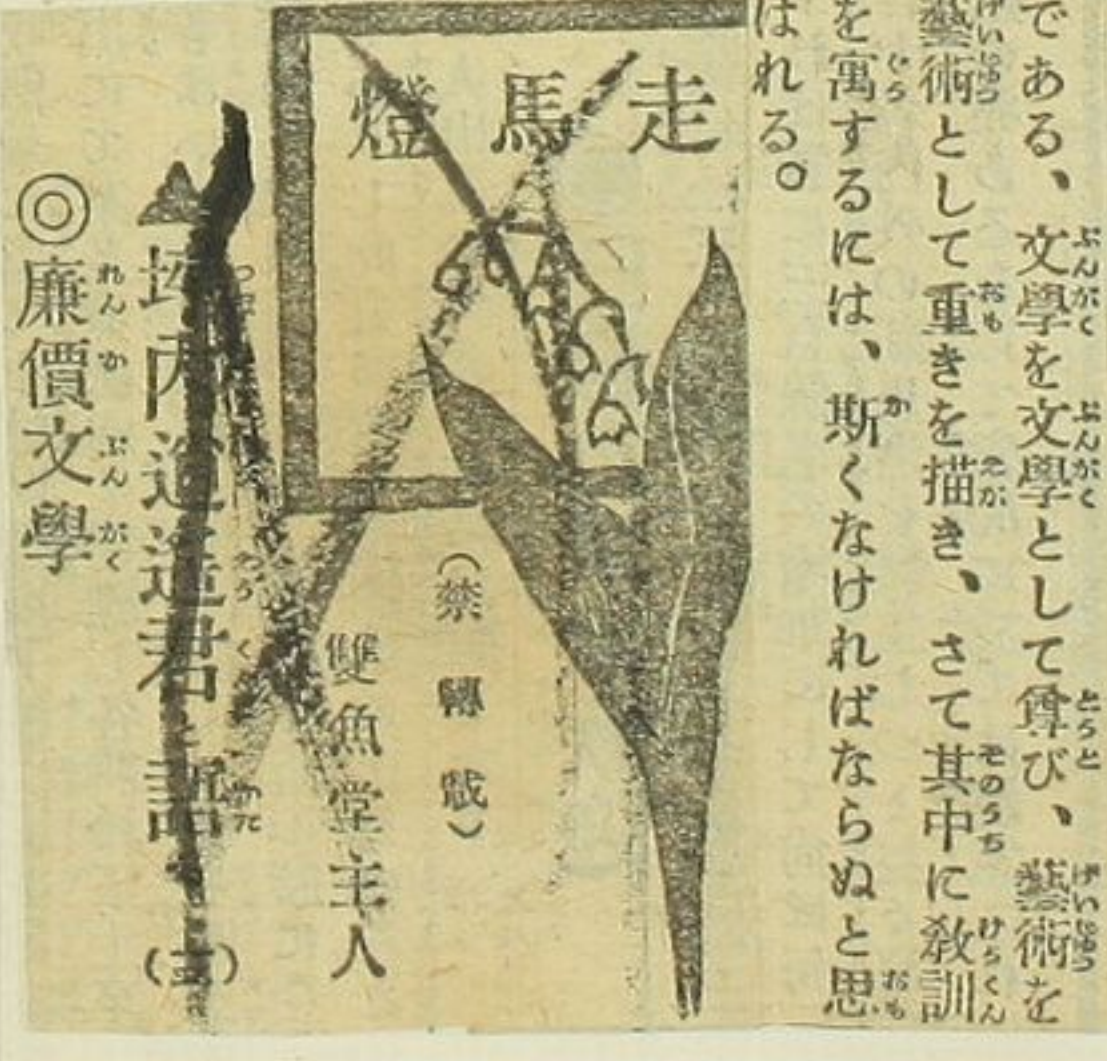
燈馬走 (雙魚堂主人)

◎中間の種類なし

文曰く、日本のお伽噺は小波に依つて成功された、併し渠の作は八九歳以下の兒童には適すが、それ以上のものに對しては少しく幼稚に過ぐると思ふ、但し十五六位な少年に對しては冒險小説其他青年小説の供給あれども、恰も此の中間が欠けて居る、これから思ひ付いて富山房から少年ものをを出さして見たが、筆者が慣れないからどうも甘く行かない……余問ふ、外國でお伽ものゝ大家は誰れであらうか、と曰く、

◎小説と教訓

お伽噺と教訓の二から談は小説と教訓の關係に及んだ。是れ曰く教訓を小説に寓するもよいが、馬琴の様な道學的教訓は甚だ感心しない、渠のとは前にも云つた通り餘りに露骨で餘りに命令的で一歩も假構せんと云ふ概がある、つまり渠は文學其ものに重きを置かず道學的教訓の爲め寧ろ文學を犠牲に供して居る。近松は流石にこれとは趣を同うして居る、心中ものなどを書くにも充分男女に同情を寄せて居る。つまり若



燈馬走 (雙魚堂主人)

長

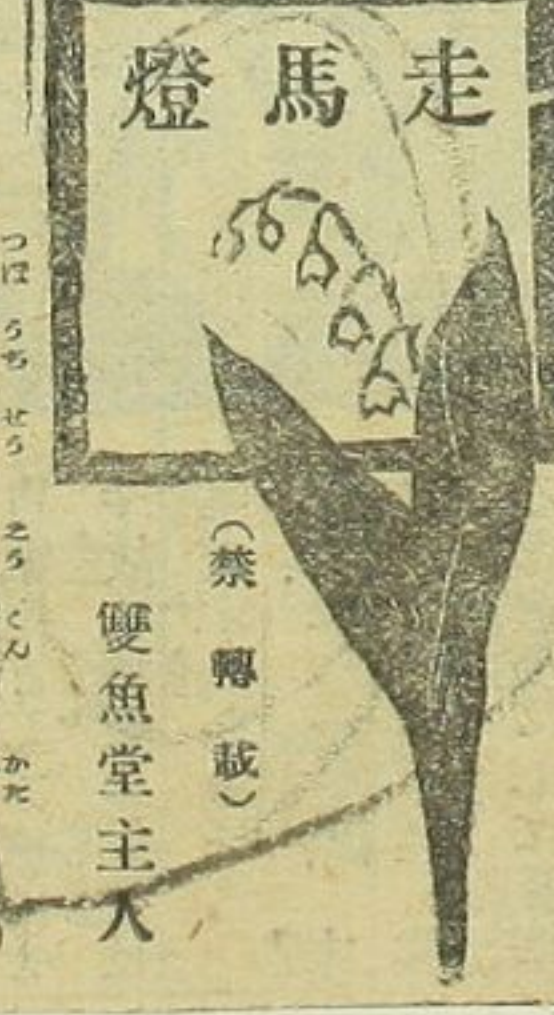
「Literature」名を以てして居る、それに就て道達の語を聞くに、俳諧に妙味がないではない、併し苟くも大手腕を有するものが十七文字文學の極致を得たと云ふて満足すべきでない、若しこれ式のものゝ妙を得たりと云ふを以て、芭蕉と並び稱せらるゝを得ば、蓋し易々たる業であらう。余のこれを以て廉價文學と云ふは、決して俳諧を誹謗せんとにはあらず、今の文學者をしてコレ式のことゝ力を籠め、それを以て直ちに満足せしめざらん爲めである、故正岡子規は俳句の妙を以て稱されたが、渠れ一個の天才加ふるに西洋の學問を以てして、俳句に成就したとて何んの不思議もない事だ。

◎故園洲の藝

故園十郎の藝に就ていろゝの話が出た折、道達の云ふには、自分が大學の寄宿舎に居つた時、團十郎の地震加藤を見た、恰かも其夜大地震があつて

光

寄宿舎の壁が墜ち何れも狼狽して駆け出したことがある、其時自分は「チアニ、コレキ」と例の團十の假聲を遣つて同窓を驚はしたことがあるので思ひ出すが、團十の藝の尤も賦が掛つてよかつたのはあの頃である、恐らく彼の藝の絶頂に達したのはあの頃であらう……また曰く、團十の藝の進んだのはいろゝの原因によるのだ、勿論依田や福地などの助言もいくらか助をして居るであらうが、實に團十は學者を噛み分け過ぎたのである。初めは學者の言を用ひ之れを尊敬して居つたので、それが終に之れを尊敬せず又其言を採用しない様になつたのは、全く森田思軒、福地櫻痴が餘りおだて過ぎたのと、無暗に頭を下たのに原因する。



燈馬走 (雙魚堂主人)

◎假面

東西古今の別なく劇の幼稚時代には何れも假面を用ひた、現代には何れも何れも偶然其換を一にするにせざるにあらす、然るに一にするも面白い現象ではないか、道達の語を聞くに、英國にはマスクと云ふ劇があつた、これは文字の示すごとく假面を用ひしは誰れも知る處である、然るに支那にも古く假面をかぶる劇、希臘羅馬にも是をせしめあり、又南洋の諸嶋にも同くあるより見れば、劇の發達の上下に於て必ず一たび経べき順序と云つても差支へないやうである。そこで假面の性質を研究して見ると日本の南

あつた

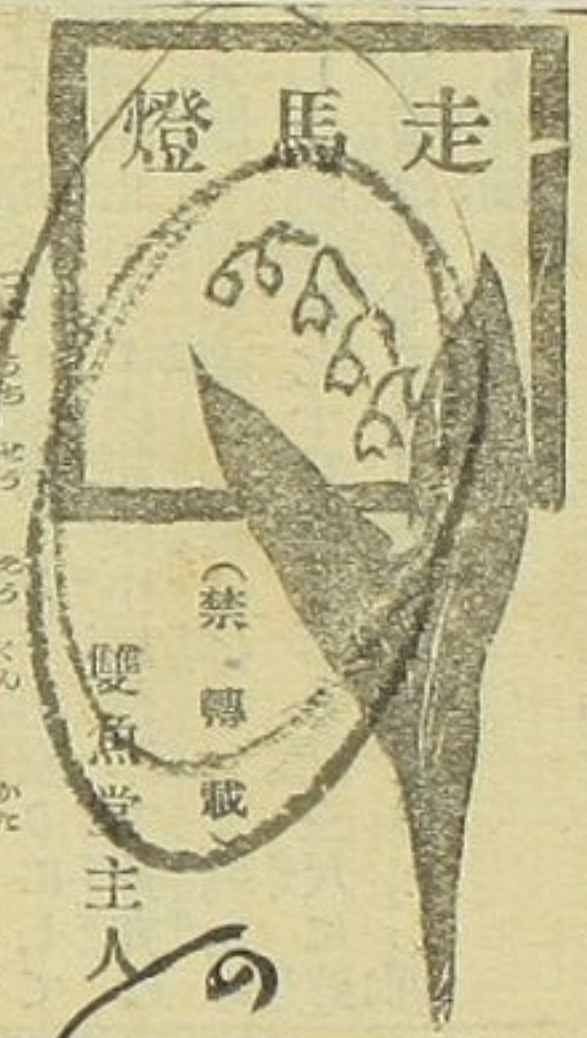
洋諸嶋の顔と同じうして居るそらだ、即ち顔が普通の人間の顔とは少しく違つて居る、中には鬼面もある、要するに善悪をアイデアライズした面である處が双方の一致する處である。希臘羅馬の自然を旨として作つてある希臘でも人間の尤も完備したのを神と立てゝある、これが希臘の理想であるから、

假面の如きも矢張り此主意から作られてある、彫刻美を以て古今に超絶してある國の作であるから、假面の作も定めし美事なるものであるが、惜しいかな傳らない、

◎自ら名乗る事

單り假面を用ふる點同じきのみならず曲中の人物が自から名乗る點なんども東西言ひ合はしたごとく支那も英吉利も希臘も同じである、云ふは如何にも妙だが、よく考ふれば不思議はない筈、劇の幼穉時代には舞臺の道具など何れの國に於ても不完全至極であるから、王者の

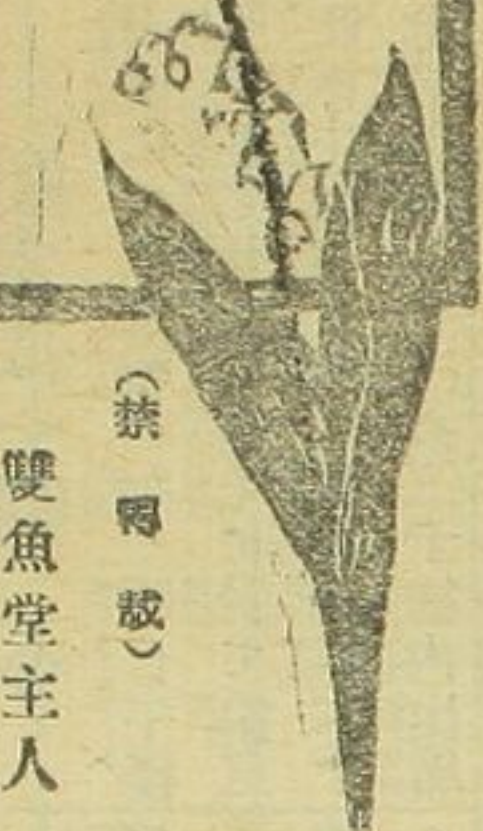
扮装も王者らしく見えざる場合には「我は王なり」と云ふて、はじめてわかると云ふ次第、恰かも日本能詞を以て舞臺上の景の足らざるを補ふと同一筆法で、舞臺の不完全より偶々其揆を一にしたものである。



◎坪内逍遙君と語る

ある、有馬、伊香保、熱海、箱根と云ふ様に在る、温泉はあるが、何れも或る病氣に特別の効がある、尙ほ教訓を馬琴流に仁義禮智などと特定すると同じものである、これを「海水」を目的として居るもの、海水に遊んで居る様なものだ、特效は無い、亦利け目も著しく見えんが誰れにも利く、病人にも利けば健康體にも利く、しかし時々危険のことがないにも限らない、或は時に激浪に捲き去られ、若くは海嘯の難に遭う様なことが無いにも限らない、又時に汚穢が流れ来て五体を汚す様なこともある、然かしながらこの危険あるために其効能を没することは無論出来ないのである。

燈馬走



雙魚堂主人

◎坪内逍遙君と語る

要するに其主眼は違ふけれども目的は勿論どれにもある、そこで今比喩を設けて説明すれば、或る特定の道徳を標榜して勸善懲惡を目的として居る小説は、恰かも温泉に浴する様なもので

て廣くセコンド、ネチエリアを目的とするものもある。併し小説家自身が定めた道徳を標準として之れに準據せしめんとて書いた小説は餘り好ましくない、いかに巧みに出来ても餘り價値ある藝術品となすは出来ない、馬琴の小説の短所は爰に在る、そこへ行くとき近松の作は大いに違ふ、彼れ自身が意識して書いたか何うかは知らぬが、人情の自然を寓する所に自ら教訓あり、其教訓は馬琴流の窮屈な型に箝めんとするにはあらずして、觀た人の判断に委する趣があつて極めて廣い、即ち彼れに在つては勸善懲惡を露出せしめども、これに在てはセコンド、ネチエリア間に教訓を寓するものである。

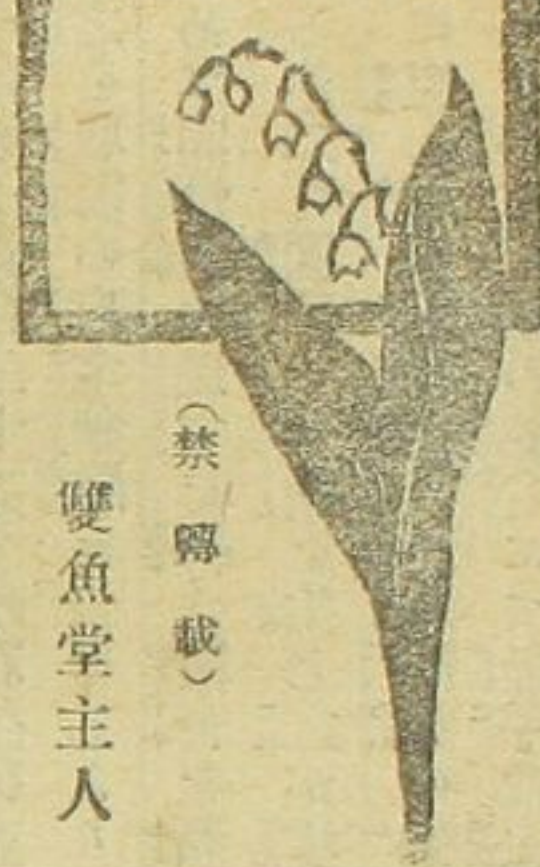
◎西洋の大家

西洋の作家の内尤も大なる教訓を寓して居るはセックスピアである、觀る人によりていろいろの教訓の得らるゝ所流石に大きいものである。ゾラは如何と云ふにあれも教訓を目的として居るものである。

セリット

それは例の美少年録である。逍遙の語に依れば、當時或る書肆が馬琴の前にウツカリ口をすべらし、男女のイチャツクさまを寫す事は御徒町(種彦を指す)は流石に名人だと云ふたのを小耳にはさみ内々癪に障つて自ら發奮し筆を起したのが美少年録である。なるほどこれには随分キワドイ處が思ひ切つて寫してあるが、どうしても支那小説の口吻を脱し得ない、そして矢張り道學的斷案が附してあるから面白くない。逍遙の云ふは、馬琴は故ら支那小説の反響めかしい口吻を學むだ氣味もある、今から考へると兎に類する手段であるけれども、當時はいくら淫猥のことを書いても支那小説から来たと云へば、それ自分の責任が免かれ得たのである、不思議だ……。

走馬燈



雙魚堂主人

坪内逍遙君と語る (三)

外國の書物を反譯し始めてから最早大分年所も重なるから、反譯の業も大いに進み、譯字なども凡そ一定しそりに思ふ所が、なか／＼左様は参らず、却つて益々銘々勝手に區々に成り行くは歎すべきことである。逍遙はこれを評して文學者の成程これも爲我の一例とすべきである。譯者自身に取りては銘々勝手なるがよかるべきも、讀者は實に迷惑千萬である。例へば同じアリストートルでも、獨逸ではアリストテレスと云ひ同じプレトリーでも獨逸ではプレイトンと云ふ様な譯で、國に依り其の呼び方が幾何か違ふので、較

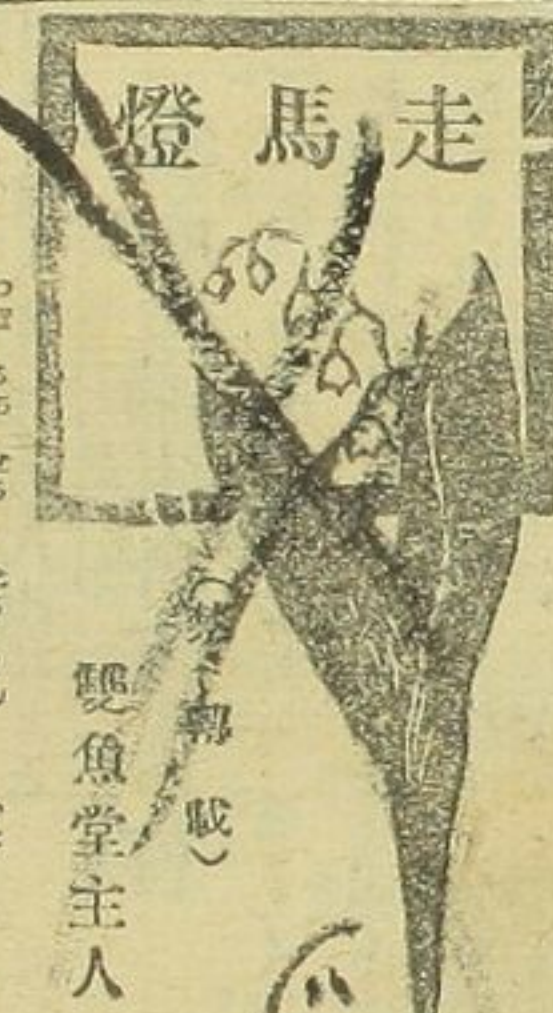
もすれば別大であるかの如く思はしむるものがある。原語を知るものすら時ありては惑はさる、況んや原語を知らざるものに於てをや。逍遙はかつて書生が外國の學者の名を銘々個々に書いたのを調べて置いたとがある。それを見ると、ウオオズオズ(これは逍遙氏の表音法)の名を六様に書いて居る。曰くウオズブルス、

を見るに、曰く利己主義、曰く自利主義、曰く愛己主義、曰く自我主義、曰く爲我主義(爲我主義は其の譯字也、爲我は曰く。と音近かく且つ揚子にある語なれば適譯となすべき歟)と云つた様に區々になつて居る。彼の樂觀主義たるべきを強て支那の文字を當て替へんとて樂天主義と云ひ、哀樂主義たるべきも厭世主義と云ふが如きも無論當らぬ。さればと云ふて或る一派の譯字の如く善く觀るを良觀と云ひ惡しく觀るを惡觀と云ふも何となく坊頭の名の様に聞こえて滑稽である。加藤弘之翁は「はまはせ」の可らずであるか、不可不的と云ふ譯字を發見された、御變挺ではあるまいか。コッコイと云ふ鳥は音郭公と近いと云ふので、ほととぎすと譯する無理をやる人あれば、ナイトイソングルを鶯と譯する人もある、ナイトイソングルは夜鳴く鳥で鶯と違ふと聞くや倉皇夜驚と譯しかへる馬鹿者もある。

エゴチ

グラムマールは語典たるべきを、言ひ來りなりとて文典と云ふて今でも改めず、時勢のチャイルドを動もすれば小兒と心得て時勢の小兒と書あやまる書生もある。ロマンテック、ムイヅメントを傳奇運動と譯する直譯家あればリベラル、アーツを自由藝術と譯する人もある。前者はまさしもあるも自由藝術とはそも／＼何んぞ、譯者御本人おそらく中古に文法、辨証法、俗解法、算數法、測量法、音楽法、天文を七藝と名づけ機械的藝術に區別してリベル、アーツと名づけしを知らず、無暗に直譯したものであらう、若し七藝のりベラル、アーツなるを知らば、譯者にも雅藝と譯する位な働きはありそうなのである。これ等は充分本義を穿鑿せぬ上から來た誤譯であるけれども、充分本義を知りつゝ杜撰の譯語を用ひて改めぬものがある、現に或る一派のものが兩性(男女)の色慾を性慾と云ふが如き即ち其一例である。當たりに「性慾」と云つては千人が九人迄は恐らくインスチンクトの事と思ふて、セックスと思ふものはある

かかないか分らぬ、然れども或一派は毫も怪しまずして之れを用ひて居るから笑しい、其他彼の韻語と云ふべきを韻文と云ふが如き、之れ等を列舉せば僕を易ふるも能はぬ位である。



雙魚堂主人

坪内逍遙君と語る (三)

つて神經は過敏である、此點から云ふと彼等幾んど神經病者と云ふても宜しい、隨分中には癡狂院に入れてもよい様なものがある。

多感なる詩人

併し彼等の詩人たる處は全く孱弱であり又其結果として神經過敏にて、事に感じ易い所にあるのだ。かつて史家ヒュームはルソーを評して云ふに、ルソーの事に感するの鋭なる、宛がら其皮膚をむき剥ぎ、之れを大氣にさらしたるが如しと、これはよくルソーを穿つた言葉で、ルソーと今の詩人は勿論價値に於て比らべものにならないが、其の物に感じ易い處は大いに似寄つて居る。全体多感で無けれ

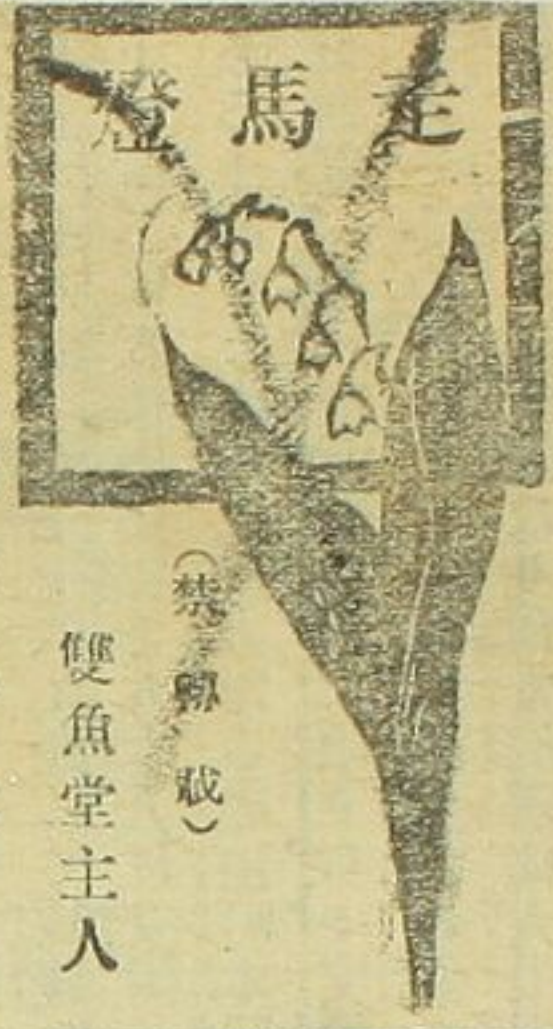
今この詩人など言ふもの程孱弱な婦人らしいものはない、深等は無もすれば流車にすら眩暈を生ずる、彼等の容貌は概して若旦那風だ、色なま白くしてうつかり見れば、役者かと思ふ。どで、昔しのカゲマなどと云ふものは其うであつたか知らんと思ひ出さると、彼等の中には書生盛りの年輩でありながら、牛肉

天

元

の

は詩人になれない、孱弱で病的のものは多感であるから詩人となる云ふ順序であるが、實は近年のごとく可憐青年を詩人として其の蒲柳の資をますゝ、羸弱ならしむるのは、誠に慨歎すべき趨向である。



雙魚堂主人

◎時勢病の流行

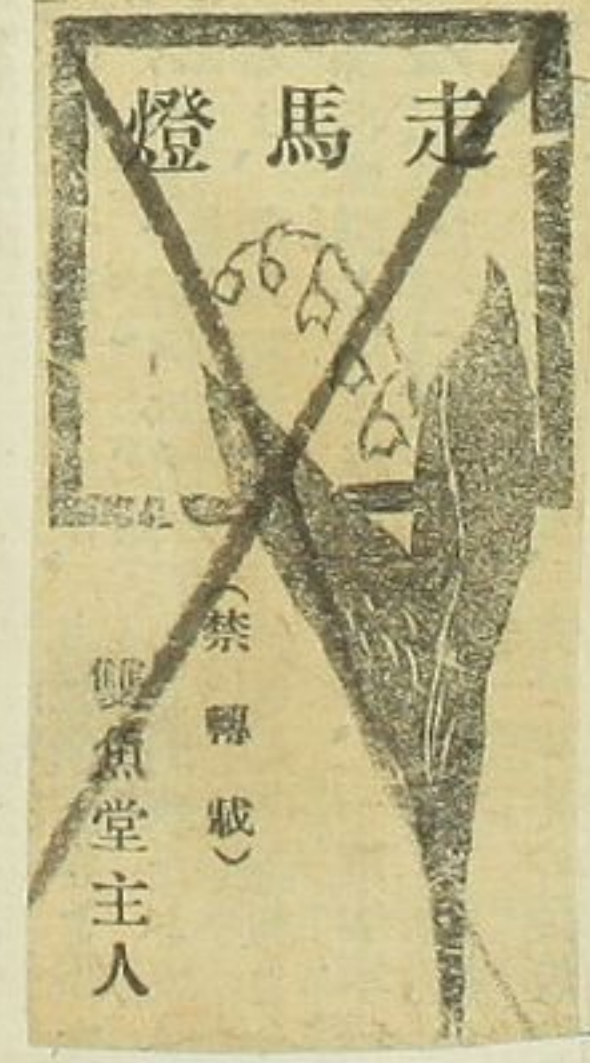
人は一概にこれを以て我邦の教育の不完全に歸すと雖も、決してこれのみが原因ではない、寧ろ世界に流行して居る一種の時勢病に感染したのであつて、大きく云へば文明の餘弊と云は

昔しも羸弱の人間は多感であつたに相違ない、其中には詩人を氣取らんとしたのもあるであらう、乍併今日の如く詩人の位置は高くなかつた、亦周囲の批判も強かつたから、勢ひ自から屈せざるを得なう。然るに近世文明が大いに進んだ結果として、個人主義はいたく持て

るに至つた、随つて何人の自尊心をも増長するに至つた。詩人なども昔は世間の如く思はれ、若くは羽織破落戸の如く考へられたのが、今や高く自ら標榜し、兎もすれば詩人は靈の尤も靈たるものでネチユーアと餘り遠からざるものと如く自らも尊大に構ひ、人も之れを誦すこととなつた。これ全く文明の澤に依るものである。

◎個人萬能の世

個様に詩人に自尊心が生じて見ると自分が弱點あつても之れを弱點と思はない、位置未だ高からず周囲の掣肘を受け



雙魚堂主人

◎病的の繁殖

ところが此の時勢病と云ふものは、ますます増長して行く傾向がある、何故となれば此の時勢病に罹つた詩人は、前にも云ふ通り一種の病人であるが、文明のお蔭でこれが貴まれ且つ保護せらるゝ。否な雷に此の詩人が保護せらるゝのみでない、此の詩人が産み落したる子も孫も曾孫も、皆な鄭重に保護せられてま

◎文明の餘弊

文明と云ふものは餘りに手が届き過ぎて、却つて人をますゝ孱弱に導く傾向がある。例へば教育に就て見てもその通りである。いつか或る書肆から出た教科書を見るに、其巻首に極彩色の繪が附いてある。成る程これは快樂の間小兒をして讀書の趣味を感ぜしめん爲めならん、理窟は至極よい様であるが、これでは全くのおもちゃである、文章の書き方などもすら〜と少しの考も費さ

すゝ繁殖する。これは文明の慈悲であつて、至極結構のことの如くであるが、實を云へば羸弱の人類をますゝ繁殖するのである、更らに強よく云へば癡狂をますゝ繁殖するのである。却つて詩人は例へば病的であつても詩を作る一種の藝能を有して居るから、無用の人間と云ひないが、其の子になると詩才は遺傳せずして病的の處のみを多く遺傳する様に至るとますゝ病的の處を遺傳するから、大抵詩人の系圖を調べて見ると、

三代目あたりは先づ癡狂と相場が極まつて居る様である。然るに文明が之れを庇護し癡狂院などに入れて、偏へに同情の涙を流すのは、人情としては非難は無論出来ないが、病を保存し助長する上から見ると、文明の餘弊たるを免かれない。

◎文明の餘弊

文明と云ふものは餘りに手が届き過ぎて、却つて人をますゝ孱弱に導く傾向がある。例へば教育に就て見てもその通りである。いつか或る書肆から出た教科書を見るに、其巻首に極彩色の繪が附いてある。成る程これは快樂の間小兒をして讀書の趣味を感ぜしめん爲めならん、理窟は至極よい様であるが、これでは全くのおもちゃである、文章の書き方などもすら〜と少しの考も費さ

すゝ繁殖する。これは文明の慈悲であつて、至極結構のことの如くであるが、實を云へば羸弱の人類をますゝ繁殖するのである、更らに強よく云へば癡狂をますゝ繁殖するのである。却つて詩人は例へば病的であつても詩を作る一種の藝能を有して居るから、無用の人間と云ひないが、其の子になると詩才は遺傳せずして病的の處のみを多く遺傳する様に至るとますゝ病的の處を遺傳するから、大抵詩人の系圖を調べて見ると、



雙魚堂主人

坪内逍遙君と語る (三)

◎長壽と大作

逍遙歎息して曰く、日本人は身体が羸弱

であるから、到底名篇大作は出来ない、天才早熟のものは別として、大作雄篇を出す作家の年齢を見ると、何れも晩年で五十以後に尤も多し、即ちワグネルにしてもゲーテにしても皆高壽を保つた人である、傑作は皆晩年に出たものである、日本でも馬琴は高齡を保つたがこれも亦同じことで、大作を成就し得たのは全く年のお蔭である。

◎弱點の辯護

人間にはいろいろの弱點がある、而して自から弱點を知り之れを矯正したいと思つて居つても、ヒョット其の弱點を「ジャステファイ」する様な事柄に出會うと弱點を弱點と思はなくなるのみならず、ますます其弱點を増長せしめて恬然たるに至ること儘々目撃する所である。之れにつき是はシンキウエツチの書いた「無定見」と云ふ小説の中に、好適例があると云つて語つた。小説の題名の如く、此小説の主人公は無定見の人で、

◎故春 故公

人によりては自分の弱點を「ジャステファイ」するために、殊に諸書を涉獵して愛身を愛すものもある。故伊藤公なども時局に遣り損つたとき、退いて資次通鑑や其の政治史を讀み癖があつたが、あれは恐らく自家の失敗を辯護する材料の取調べであらう。伊藤公に限らず昔しから此種の人は

走馬燈



(禁 傳 載) 雙魚堂主人

◎自殺者も然り

又近頃青年が兎もすれば自殺をする誠氣の少さいことである、本人自身と雖も決して自殺をよいこととは思つて居らない、然るにいろいろ煩悶して居る途端に例へば西洋大家の説などで自殺を可とするの論でも見ると、先生これで初めて安心をする。即ち自分の説が大家に「ジャステファイ」されたのであるから安心するのであるが、怒うなると自殺をわるいと思はず、終に實行する氣になるものだ。彼の藤村操以來いろいろの

いッブの頭腦には本當の判別がつかないから、ともすると取りかへしのつかぬ間違を生ずる、先進の學者よろしく注意すべきである。

◎小説の感化

小説の感化と云ふものは意外に大なるものだ、逍遙の話しに故長谷川四迷の優

柔不斷の性質、例へば一つの作を

出すにも長い日子を要する如きなどは確かに「ストラヴ」感化から來たのだと云ふて居る。又嵯峨の舎なども、全く露西亞小説を讀むたお蔭で方向を過つたと謂ふて居るそらだ。

◎二作家の経路

英吉利の小説は日本の小説と趣きを同ふして居る處がある、

それだから日本人に入り易い、我輩などの大學時代にはリットンやスコットの小説が多く讀まれた、あれなどは日本人に投するも無理は無いのジャ、然るにあの

頃故長谷川四迷や嵯峨の舎などが露西亞小説の趣味を感じたと云ふのはどうしたことかと久しく思つて居つたのである。ナントなれば、リットンやスコットを受ける日本人に受けらるべき性質の小説でない、それを早く趣味を感じたに就ては必らず特別の原因があつたに相違ない。これにつき逍遙の語る處に依れば、長谷川は露西亞語を外國語學校に學び、當時露西亞語の教師を遣つて居つた西洋人は、非常に小説好きであつて、兎もすれば課業時間の半ばを小説の講釋で潰すと云ふ様な仕末であつたから非常の感化を受けたのであると云ふ事だ。嵯峨の舎は後進である、無論此西洋人からも教はつたのであらうが、寧ろ長谷川の感化を受けた方であらう。長谷川は此の方面に於て一時なかくの勢力を有して居つたもので、露西亞小説派を日本へ導いたのは全く長谷川の力である。

走馬燈



(禁 傳 載) 雙魚堂主人

◎理想を追ふ

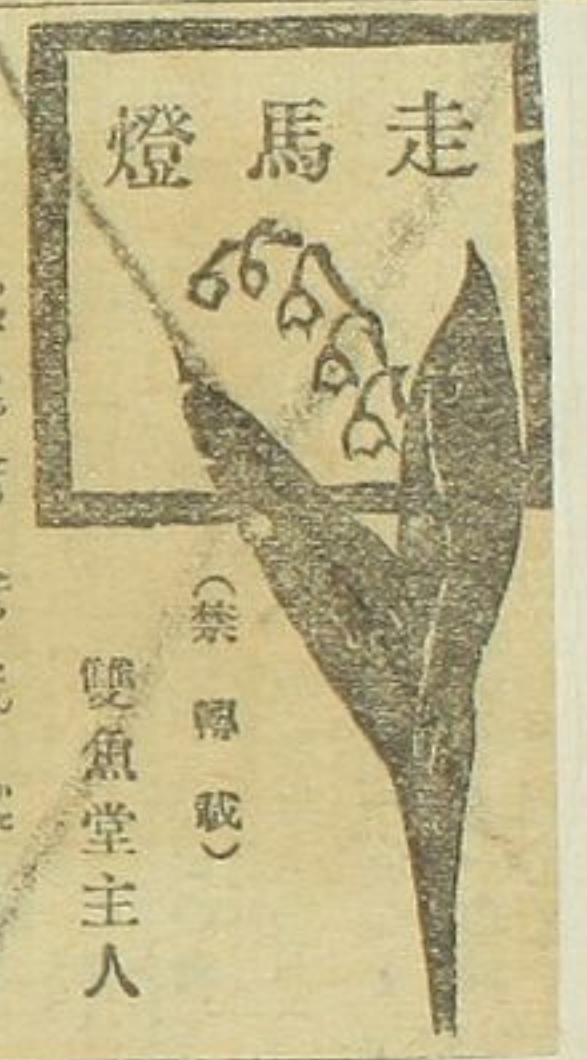
君はいろいろの小説や脚本を書いたが、あとで見るとどうか不満足に感ずるものもあるか。逍遙曰く、あると満足に思ふのは其の當座ばかりだ、自分是不肖で文章などは上達はしないと思ふが、確かに理想だけはいくらか進む様に思ふ、自作に感服しないと云ふのも理想が進歩する一證であらう。梅若實は七十になつても、まだ藝に満足して居らなかつた様だ、理想を追ふものは満足が出来るものでない。

◎作とセント

逍遙曰く、大體の作家はとも晩年に作意が結晶したり、文体がクラシムズムになる様だ、自分はどうか逆に遣りたい積りだ。又曰く歐州などは人の云ふことに耳を傾むける様だ、随分人から「ヒント」を得ることもある様子だ、自分はそこへ行くと偏狹であつて、ドウも人から與へられた「ヒント」で作を遣るのが面白くない、「ヒント」は**全幅の點睛**とも云ふべきものであるから、これ丈は他人に左右せらるゝとなると、どうしても自分の氣が許さない……。

◎大隈伯を描す 外務大臣

逍遙の書いた小説に「外務大臣」と云ふがある、これは完結に至らぬで仕舞つたが、今では記憶して居る人も少からう、曾て讀賣新聞紙上に連載されたが餘りに受けなかつた様だ。これには大隈伯が描してある、伯が横柄に人に挨拶するとき「ボク」と云ふ癖がある、これがそもく初めて逍遙の筆に描されたが、伯夫人はひどく之れを氣にして怒つたさう



走馬燈 (禁傳載) 雙魚堂主人

◎芝居は夢幻劇

日本在來の芝居の多くは夢幻劇である、夢幻劇と云ふは逍遙の造語で、劇の仕組がロジカルに一貫して居らず、夢の如く又夢幻の如く交錯して居るのを謂ふたのだ。逍遙が最初此の語を遣はしめて、日本劇を論じたときに、歐州は夢幻劇は珍らしくもない、外國のオペラ等皆夢幻劇だと例の負けず氣で評したことがあるが、勿論逍遙は日本の特産物だと云ふた譯でもなく、珍らしいと云ふたのでもない、唯だ日本の劇の性質を辨じた迄の事で、兎に角其の性質がよく明らかれたのは逍遙の功に歸せざるを得ない。

◎碗盛へナリツ油 趣も妙味も亦夢幻交錯の處にある

如此日本在來の芝居は大抵夢幻劇である特に近松ものは概ね夢幻劇であつて詩趣も妙味も亦夢幻交錯の處にあるのだ、然るにそれを辨せず、故福地櫻痴の如きは矢鱈に近松を改竄して詩趣を抜き去り、易ふるにロジックを以てしたから日本式碗盛の中へフリツ油をたらした様なものが出来て、少しも味が無い。全体八百膳の料理は矢張りどこまでも之れを日本式にして保存するがよいのだ、これにフリツ油などを加味すると云ふは誰れが見ても間違つた遣り方であると。これは逍遙の夢幻論である。

◎立作者と向機敷

いつごろから初まつたことか知らんが歌舞伎座に於ては向正面の機敷の所得が立作者の収入になることに定まつて居る。多分默阿彌を優遇するから初まつて、櫻痴居士も其機敷を繼承したのであらう。これに就て妙なことがある。西洋では作者

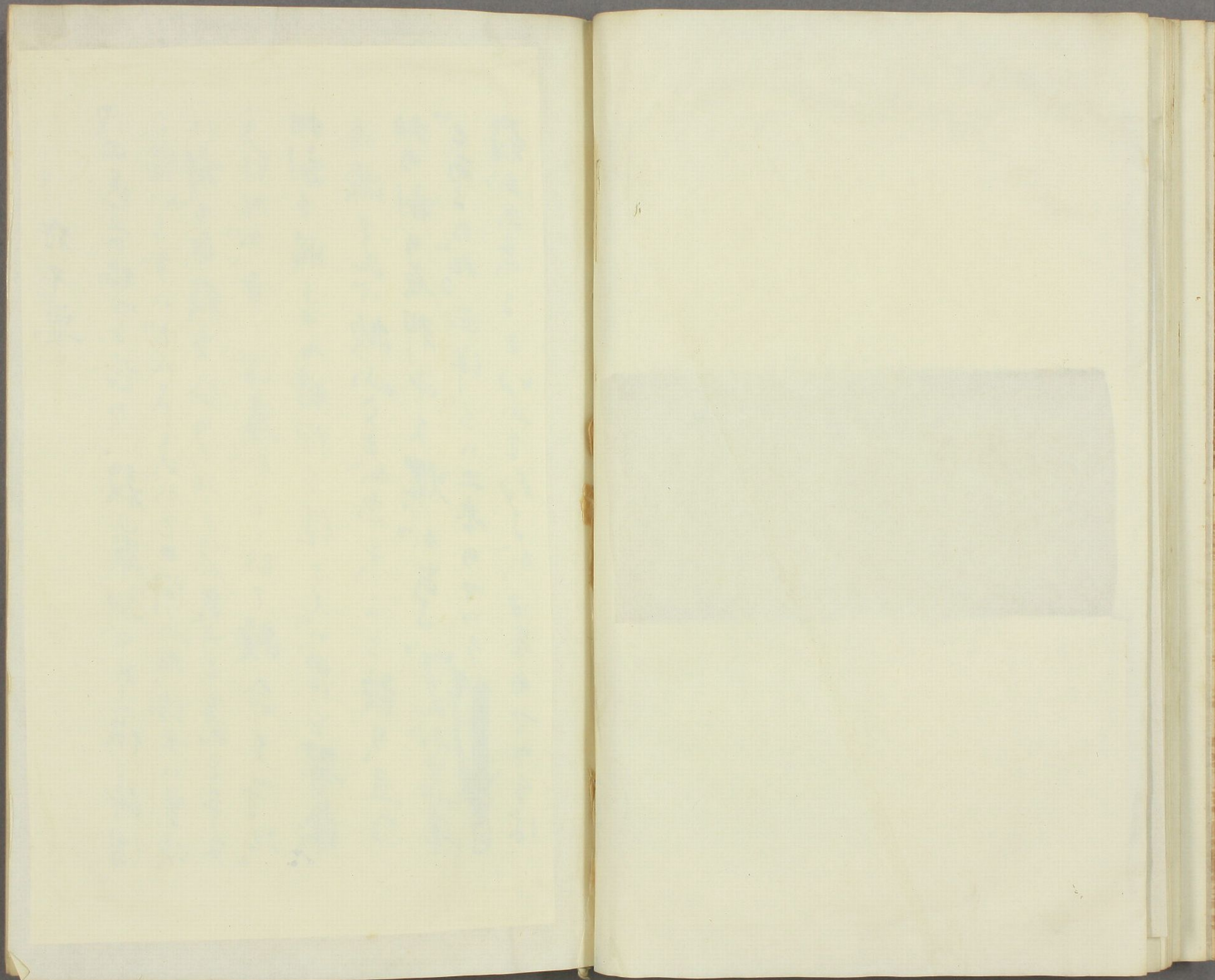
◎東西作家の比較

ドライデンと云ふ詩人は日本の福地とよく似て居る、彼れは政治的智識を有して政治上の論評を遣つたのを見ると實に立派なものである、それで大詩人である、セイクスピアの諸作を彼是増損して舞臺に供した處などは、櫻痴が近松の諸作を燒直して舞臺に上ぼせた事實とよく似て居る。然かしバルンスの方が遙かに大なる詩人であることは固より比較にはならない。ポーブが百鍊千鍛字句の推敲で憂身を養つて居る所はまるで尾崎紅葉である、而して其の爲人は正直正太夫をつくりである。若夫、テニソンを以つて紅葉に比すれば、ブラウニングは露伴である。而して其の作の晦澁にして意通じ難く、六かしき故事や熟字を用ふるあたりは森槐南に比すべき歟。ブラウニングの詩はセイクスピアを讀むより遙かに面倒である。それであるから此詩人の存命や既に彼れが作を讀爲の字書が世に出で、又ブラウニング研究會も各處に起つた。(未完)

の作をやらせまいとして……味方を入……
て歌舞伎座で長用……作つたものを向正面から散々に妨……たことがある、これは櫻痴の和工に相違ない。彼れは舞臺の此一部に主權を有して居るから、無料自分の味方を驅りあつめて上げれば、必ひ存分に妨害は出来るのだ。

走馬燈 坪内逍遙君と語るの項は讀者の味采裡にこそ兩三日中に完結すべく、次で掲載すべきは同じく當代の文壇幸田露伴君の釣針にして其趣味を本

走馬燈 (禁傳載) 雙魚堂主人



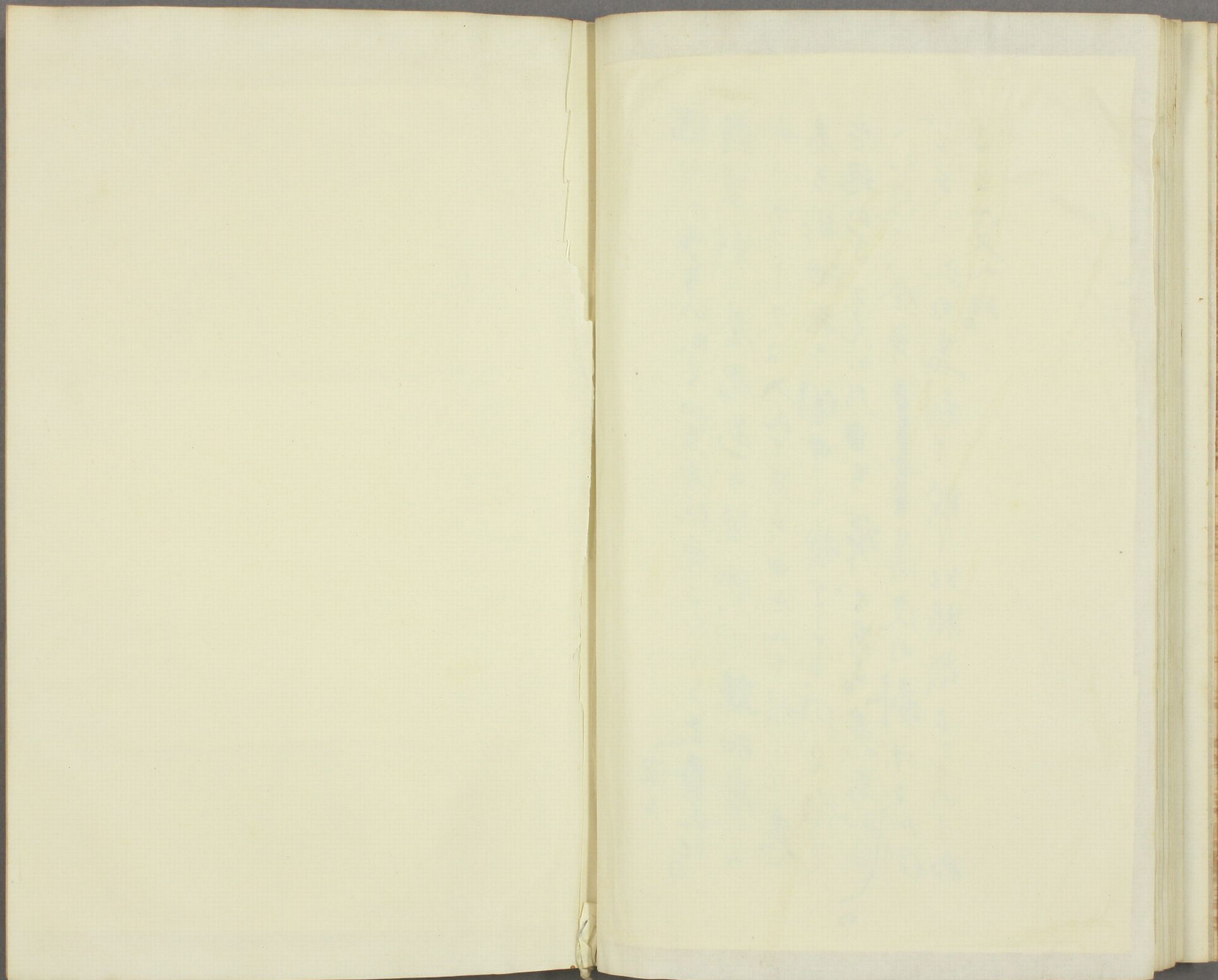
猫不憂

凡上医の協士と云々、殺鼠劑があるは、所謂
の猫いらずハ、此の毒劑である。何れも、協士ハ、先次
此劑ハ、自殺を命じたものか、あつても、多んを幸ふ
うけ、此が、幸に治癒が、と、以て救命を得た。
此劑を服した、時間を経たぬ、ハ、胃を掃除
洗濯せん、故に、ことか、出来ると、決り、且つ
此の劑の原料中、燐がある、~~多んが毒素~~
であるのだ。西洋のハ、二本のマウチ、~~自~~
殺が出来ると、いつても、日本のマウチは、

東洋の毒物

燐分が、少く、いか、四五本位、要ると、~~多ん~~比。
殺鼠劑の、茶褐色の、煉葉の、煉粉、磨の
かく、テ、エ、ー、グ、ア、入、ん、と、ある。多んを、服した、毒
者の、排泄物を、胃中、に、検する、と、閃々、微光
を、認める、多んが、乃ち、燐である。患者、が、愈
へ、以後、ハ、全身、~~薄皮~~の、剥け、が、例
がある、此の、毒劑を、服した、特徴、と、する、と、お
ると、又、へ、た。

一〇



トラス

市の文野は市際によつてそのおほよそを知ることが出来る。たとへば日本の首都東京にしても、少しく過つて乗り物か馬と駕籠であ

つた時代と現在とを比較したらどうであるか、徳川時代封建の末路には四民の階級がやかましく、乗馬に頼り、駕籠に乗るものは大名や士分であつて、大名の通行となると叱喝の聲が途上に充ちた。低い階級のものはいくを避けるに右往左往の狼狽をやつて小兒は泣き叫んだ位であつた。それから明治になり人力車などが出来てから階級制度は漸く破れて叱喝の聲は絶えしたが、東西に馳せ進ぶ車夫の掛聲は市中に充ち満ちた。この掛聲は今とは違つて物賣り商人が聲高にいろいろの叫びもし人語は市上に喧嘩を極めた。別して荷車などの掛聲は一段の喧嘩を加へたが、今は電車が縦横で公衆は殆ど皆之に乗り、富豪、大官は自動車を用ひ、市量ある貨物も亦多くは自動車運ばれる時代となつたので人語は幾んど市中に聞かれぬ。勿論今も市中に一種の騒々しい市際はありますが、その種類が違つて来た。前には人語が市際であつたが、今は鐘や機械の聲がそれに代つて市際となつた。自分が一國の文野は市際によつて略推測し得られるといふのも即ちこの事である。

トラス

曾て支那の北京に遊んだ時、驚く市際の喧嘩を感した。おおよそ北京の市中ほど騒がしいところは世界にあるまい。各種の車が騒々する。街上に物賣りが奇聲を發する。車夫が怒鳴る。馬丁が叱咤する。物賣りは太鼓や銅鑼を鳴らす。四路に行違ふ幾萬の人の混雑は全く名状の外にあるが、何れにしても北京の市際は複雑なものはない。随つて、それだけまだ文化に遠ざかつてゐるのである。支那はまだ鐵道が市際を代るまでに相當の年數を要するであらう。

明治戊辰の回顧

本會理事長 市島謙吉

ことし昭和戊辰の歳に當る。私は例に依り年頭早々旅行を企て四日といふ日に、先づ國府津にある高田早苗氏を訪ひ、次で熱海に坪内雄藏氏を訪はんと家を出た。日暮れ方高田氏を其別荘に尋ねて見ると生憎不在であつたので、已むなく國府津の旅館に一泊し、翌朝熱海へ赴くことにした。扱て旅宿に語らう人もなく、獨坐蹇然としていろ／＼の事を案ずる内に、ことし戊辰といふに考へ及ぶと同時に、六十年前の戊辰の事に及び、恰かもけふ一月四日は鳥羽伏見の朝幕開戦の日であることに思ひ及び、冥想は歴史を辿つてそれからそれへと馳せ、先づ明治元年の戊辰に自分は幾歳であつたかを指を屈して數へて見ると、僅かに八歳の頑はない小兒で、郷里越後の水原の家にとつて追憶した。郷里は徳川氏の代官所の置かれた所で天領であつた。それが會津口に近いために、會藩の重臣が數々來て私の家に宿つたことを想ひ出し、更らに某といふ會藩の武將が官軍に對抗するため、私の家に出征準備をなし、指揮旗を作つたことなどを憶起し、更らに多くの官軍が乗り込んで來て、私の家に多數長藩の將卒が泊り、いろ／＼亂暴をやつて家人が困つたことなどを思ひ浮べた。當時八歳の小兒に時勢の辨へがあらう筈もなく、唯だザワ／＼騒がしいのを面白がつてゐた位であつたが、愈々私の郷里が戦争の巷になるといふことから、避難して信濃川沿岸にある所有田地に附屬する控家へ移されたが、こゝは戦争は無つたけれども、非常の洪水が起つて堤防が決潰し、堤防下の家に在つた私共は、半夜庭から舟に乗つて倉

皇避難せねばならぬ事となり、夢中に船中で一夜を過したが、朝になつて見ると、滔々たる濁流中の高い樹に吾等の船は繋かれてゐて、幾十の茅屋が流されて來るのを見ては小兒ながら悽慘の感に堪へなかつた。戦争よりも恐るべき水害に遇ふて、此處に居りがたく、更らに母方の家に預けられたが、こゝにも多少の戦闘があつて、銃聲を遙かに聞いたが、小兒の心には案外に恐ろしとも思はず、村童と擬戦をやつて叱られたことなどを思ひ起した。それから亂平いで私も家に戻つたが、純仁の宮が越後へ下降になり、西園寺侯がそれに隨伴して私の家や私の妻の家にも來られた。侯は其頃十九歳で、記念にとて書かれた額面が今も家に存してゐる。私が長じてから、戊辰史を讀んで見ると、鳥羽伏見の戦の起つた時、京都の朝廷では廟議區々で、公家の長袖連は附近の戦争に怯氣がさし、尻込するのを制して一喝したものは岩倉公と西園寺侯であつたことを知つた。侯は長袖不似合に大勢に通じ、おのづから人格を異にする所があつたので、今日元老の地位にあるのも偶然でなく、又、征討宮に隨伴され亂地に來られたのも偶然でないと知つた。伏見鳥羽の戦争は維新の幕を開く前齣として大切なものであつたが、幕軍は一敗地に塗れて爰に維新の大勢が定まつた。其記念すべき日が恰かも國府津に宿した其日であるので、私は萬感の交々去來するを禁じ得無かつた。實は今回吾が文明協會創立廿年を機とし、戊辰記念會を開かんとの念を發したのも此時からである。

私は前陳のごとく明治元年は八歳の小兒であり殊に地方にゐたのであるから、當時の事は分つて居らぬ。長岡の戦争や私の郷里に越後府の設けられた事などに就て多少知つてゐることもあるが、皆事が地方的であるから、茲に云ふ必要もない。實の所私は戊辰の追懷談などをする資格を有ないのであるが此會を發起した因縁もあるので、同人より強てといふを辭しがたく、これまで諸先輩から聞いた話で、殊に維新の重大事項に屬する二三を擧げて當時を偲ぶ材料に供せんとする。云ふまでもなく明治戊辰は改元の歳で、四月に江戸開城の事あり、皇上東遷百政こゝに新たになつたのであ

るけれども、維新の鴻業は戊辰の年に成つたのではなく、僅かに輪廓が定まつた位で、藩籍奉還すら四年の後に在り、維新の大業は前にも後にも跨つてゐるから、私の左に掲ぐる事も戊辰の前後に涉ることは已むを得ないのである。

新政府の財政

幕府に取つて代つた新政府が先づ困難を感じたのは財政の窮乏であつた。此事に付ていろいろ書かれたものもあるが、私は帝大在學時代に大藏省の官吏で樞要の地位にあつた佐伯惟馨といふ人が、大學の依頼を受け、課外に維新當時の財政に就て講演したことがある。其の講演が簡單ながら要を得て居るから、それを左に掲げる。

所謂大政奉還といふことは、慶應三年十二月にあつたことであるが、其の時分朝廷に入つた財産は何程かと言へば、僅かに淺草の倉庫に米が二萬五千石、大阪の倉に四萬千石、西京二條に五千石、合計七萬千石の米が手に入つたに過ぎなかつた。其中江戸城が遂に朝廷に歸したから、漸を追ふて政府の收得も増加するに至つた。明治四年迄に朝廷の有に歸したものは、大阪、西京、江戸、神奈川にあつた米穀と、大阪の銅座、佐渡の鑛山などを合せて五十七萬二千九百三圓といふ金額になつた。勿論此外各地にある代官所が皆政府の手に歸したわけである。随つて更に幾何かのものが這入らねばならぬ譯であるけれども、王政各地に遍及せざる當時として、名義は政府の所有になつてゐても、實は然らざるものが多かつた。さうして、米はあつても金はなかつたのである。

右の如き次第で、征討の軍を出すについても、政府には一錢の金もなかつた。然るによく其の效を奏したのは、當時勤王の魁となつた薩長土肥四藩に於て、各々十萬圓づつ、を朝廷に獻納し、之れを以て其の軍資に充てたからである。此の四藩は事實に於て政府を受持つて、吏員の俸給の如きも政府では支出することが出來ず、多くは此の四藩にて負擔したのである。

かゝる書生流儀の遣り口でも、尙ほ軍資に不足を告げた。其時分三岡八郎(由利公正の舊名)といふ人があつた。古い財政家で、明治史中逸す可からざる人であるが、これが西京二條に金穀出納所を置いて出納を監督し、初めて大政官札を發行して其の困難を濟はうとした。然るに紙幣の信用が薄弱で、どうしても通用しない。そこで安藤就高が大阪から出て來て、三岡に次いで財政を掌つたが、到底此の困難は容易に救へぬと見て取つて、止むを得ず三井、小野、島田等の豪商を呼んで強談をして正金を借入れた。明治元年から四年迄の借入金は實に六百九十三萬七千四百七十七圓で、此中八分通りは三豪商が出した。此の三人から借りた金は明治五六年頃に返却されたが、此外に三府及兵庫の商人からの借入金が四百六十四萬九千五百圓。オリエンタル、バンク其他の商社よりの借入が九十九萬四千八百七十五圓、即ち合計一千二百五十八萬三千三百九十七圓で、此中内國人から借りたものは皆紙幣で返金した。併し何れも無理押しつけに紙幣を取らせたので、實際紙幣の信用は極めて微弱なものであつた。

函館征討

新政府の財政難は斯の如くであつたが、榎本大鳥等が幕府の軍艦を奪つて函館の五稜廓に據り、なか／＼降らないので、當時の大問題は之れを討伐することであつたが、さて軍費に窮した。一夜三岡八郎が大村益次郎と對酌中、三岡の言ふには蝦夷は北門の鎖鑰で、且つ沃野千里、誠に大切な處である。榎本等の降服せぬのは困つたことだが、是非平らげなくてはなるまい。大村曰く、それはもとより同感だ、たゞ征討の軍資のなきを奈何せん、もし卿が乃公に十萬圓の金を拵へて呉れ、ば直ぐに平らけて見せる。三岡之れを聞いて黙然として思案したが終に策を得なかつた。其後二人が

安藤就高と對酌した時、三岡は安藤に向つて、どうだ十萬圓出來ぬか。安藤曰く、出來ないでもない。何の爲めに其金を要する。三岡曰く、函館よ。安藤曰く、それならばよろしい、必ず調達して見せよう、と引受けた。

そこで安藤は、三井其他の豪商を呼びよせて、政府に今二十五萬圓の金が要る。ついではお前達、速かに之れを調達せよ、併し皆一時に要るとは云はぬ、先づ十萬圓だけ出してくれ、あとは四五月の後でよい、と強談した。處が豪商連は十萬は愚か一萬と雖も出來ないと辭退したので、安藤大に怒つて、それならばよろしい、直ちに兵隊を派して、汝等の倉庫を封鎖する、と大喝した。豪商等もこれには驚き、協議の上終に五萬圓を納めたが、此の五萬圓の金が直ちに函館征討の軍資金となつたのである。當時の脅迫手段、想ひ見る可きである。

こんな具合で當時の豪商から調達せしめた金額は段々多くなり、遂に小野からは三百萬圓、島田からは六十萬圓に及んだ。其の結果、小野組、島田組は、とうとう遣り切れなくて破産するに至つたが、併し政府は其の身代限りを命ずることは出來なかつた。小野組破産については、其の訴へを司法省で受け、大藏省は之れに關して、省内に臨時監査局を置いた、一の豪商のために特に一局を置いたのである。其處で其處分を研究し明治七年に開始して九年に局を結んだ。

當時小野の負債は七百餘萬圓であつたが、其内五百餘萬圓は政府、殘餘は民間の負債であつた。これを辨濟するため、所有の穀類、金銀其他の私財を悉く賣却したが、四百餘萬圓にしか達しないで三百餘萬圓の不足を告げたさうだ。是れ等を見ると當時政府が如何に豪商に負ふ所が多かつたか分る。

上野の戦争

幕軍が東臺に據つて官軍と一戦を試みたのは、大戦争とも云へないが、實は大切な戦争であつた。何となればこれが市街戦である、若し官軍で戦略を誤れば、江戸全市を焦土に歸せねばならなかつた。當時の人心、殊に江戸の人心は、三百年徳川氏の下にあつた關係から、嚮背も定まらず、若し戦鬪が夜に入つたならば、どんな意外の事が起つたかも知れなかつたのである。それを手際よく平けたのは大村の戦略宜しきを得た爲めである。勿論勝安芳が危険を冒して西郷の陣營に赴いて折衝したことなども、江戸を兵燹から救ふた一原因でもあるが、若し之れが焦土に歸したらば、東京に遷都も或は無つたかも知れぬのである。私が會つて土方久元伯に茅ヶ崎の別荘に面した時に、談は此事に及んだ。伯の云はるゝには、大村は近世の戰略家だ、戰略に於ては大西郷などは逆も及びもつかぬ。特に上野の戦争にて大村の力量を見る事が出来る。元來あれは市街戦であるから下手をやれば全市を兵燹に附して滅亡させる恐れがある計りでなく、手取り早く片付けぬと、夜分になれば四方の幕人が兵火を把て起るかも知れぬ、即ち此二大危険があるので、急に上野を陥れなければならぬ。之れが大村の苦心した處で、幸に戰略圖に當つた爲め、豫期の如く夜に至らずして陥る事が出來たが、之れなどを見ても、戰略家としての大村の一端を窺ふべきである。

伯また曰く、官軍には大村の如き人物があつたが、併し幕府にも之れに負けぬ人物がゐた、小栗の如きは全く智略家である。當時小栗の案じた幕府の戰略は、官軍が江戸へ集つたに乘じて函根の險に之れを扼し、東京灣から榎本の軍艦をして砲撃せしめ、全市を焚かしむると云ふ事になれば、官軍は丸で囊の鼠で何うする事も出來ない、斯くして勝を一舉に得ようと云ふ策であつた。之れは實に名策で、之れを行らるれば全く官軍は堪らなかつたのである。

其後明治政府が立つて、新内閣の組織せられた時に、内閣會議の餘談に此話が出て、皆何れも小栗の智略に敬服して譽めそやすと、座中の江藤新平が冷笑して、ナニ智略でもなんでもあつたものか、成程謀は妙かも知れぬが其謀を有效な

らしむるには働きが伴はねばならぬ、小栗にそれだけの考へがあつたら、ナゼ即時に實行しなかつたか、幕府存亡の決する大事の時に、折角の策を建てながら、其夜自邸へ歸つて寝るとは何事ぞ。見よ幕議は小栗の歸つた後一變して、翌朝は既に恭順に決したではないか。紙に書いた様な策が如何程あつても何にもならぬ、と氣焔を吐いた。江藤は敏捷で且つ實行の人であつたと云はれた。

江戸遷都の議

徳川氏が累代經營した江戸を東京と改めて、徳川氏の居城が宮城となり、こゝに新政府が設けられたのも、江戸が兵燹に罹らなかつたことが一原因であるに相違ない。初め朝廷の議は都を浪華に遷すべしといふのであつた。それは戊辰の正月大久保の建議に因るもので、當時は其建議を雄大絶倫の文と稱したが、實は達識と爲すには足らぬ。果して議は變じて東京遷都となつた。其の廟議の變じた経緯に就ては委曲を知ることが出来ないが、吾等の先輩前島密男が浪華遷都の不可なるを論じて、東京こそ其處なりと具體的に利害を條列して建議したのが、大久保公をして再思せしめた資料になつたに相違ないと思ふ。現に公は數年を経て其配下に在る前島を建議者其人であるとも知らず、會つて何人であつたか自分の建てた浪華遷都論を駁したものがあつたと云はれたに對し、前島は其建議者こそ自分であると初めて名乗を揚げたので公は深く其の達識を賞し、且つ謝されたと云ふを以つて案するに、一旦決したる廟議を動すに前島の建議の與つて力ありしことを思はねばならぬ。前島男は元來謙讓の人で、手柄顔に自家の功績などいふ人で無かつた。遷都建議の草稿の如きも一旦逸したのを後に漸やく手に入れ、久しく秘されたから、世間多く此事實を知らないが、私の處には男の自筆に係る建議書の寫と、其の由來書が保存されてゐるから、此の機會に私は展覽會に出陳する筈だが、左に掲ぐるものがそれである。讀者は男自から語る處により建議の顛末と建議の次第を聴くべきである。

明治元年、公の遷都の奏議を読み、余は遷都の地は浪華にあらず江戸なりと論じて一書を公に送たりしが、當時江戸の情勢平穩ならず、人心頗る激昂の際なれば、深く秘して人に語らず、只岡千仞氏(仙臺)と談話の折、不圖示すべき場合を生じ、其草稿を一讀せしめたるのみ。又江戸遷都の事の定まりたる後に於ては、何となく己が見識に誇れる如き嫌ありて、關口隆吉君(故靜岡縣知事)橋詰源太郎(鑛山局員)の外に示せし人も無くして過ぎけるに、明治九年の春の項、一日公と東京朱引内(市區)改正の事を談じける時、公は維新の初年予が奏議したる遷都の策を痛く駁して、遷都の地は江戸に如くものあるべからずと論じて書を投じたる江戸人ありたり、其氏は君と同一にして名は來輔と覺ゆるなり、其事に就ては史に録し其人に對しては大に謝すべき筈なるに其書は之を失ひたり、其人は未だ誰なるを知らずと、讚歎の聲を以て語られたり。余は其時にも黙して止まんと思ひたりしが、餘りに快意の制し難くて「其は只今御前に在る前島密なり」と言ひければ、公は幾回か余が面を注視せられるが、やがて肅然其身を起し、對座の卓子を一打して吁嗟乎と一聲の歎を發して曰く、其は君にて有りたる乎、予は予が迂濶なりしを歎するなり、請ふ君之を恕せよ、幸にして其書の稿あらば寫して投與せられよと。余は未だ其寫を呈せざりしに、悲いかな公は兎刃に斃れられたり。後益々深く其書を筐底に藏したりしも空しく蠹蝕に供して湮没に附するも亦口惜しければ、聊か茲に附記する事とはなしたるなり。

因に云ふ、余は鹿兒島藩にありたる頃は卷退藏と稱し、其後幕臣となる時、前島を冒し來輔と改名せり。明治二年百官名の字を通稱に用ふるを禁するの令あり。其日駿河藩の内閣に出頭し居りたるに、大久保一翁等の人々、余に如何なる名に改むるやと問ひたるを以て、余は會て支那流に名は密、字は懷之、俗稱退藏なりし故に、密とすべしと答へ、直に改名届をなしたり。

遷都問題

君が公に江戸遷都を勧めたる建言は左の如し。

大久保君に與へて東遷を論ずる書

大久保市藏君坐下

頃日、先生遷都の御奏議を傳る者有之、拜讀仕候、御見識の卓越にして、御議論の盛大なる實に拍按讚歎仕候。乍去遷都の地は浪華に如かずとの事に於ては、甚感服不得仕候。願くは尙一段の御英斷を以て、遷都の地は江戸に如かずと御修正相成度希望仕候。遷都の地は江戸に如かずと御立議不相成ば、或は關東奥羽は今日も猶王政を施し難き地と御思惟被成候には無之哉、苦し然りとせば殊に感服不仕候。目下江戸に於ける士輩の擾々たるも、關東奥羽諸藩の紛々たるも、皆貴藩又は長州藩の其名を王師に藉りて虎狼の慾を肆にするに非るかを疑ふに因由するに他ならずと存候。是故に彼等をして、眞誠に王政維新の大業を被舉候廟謨なるを明了せしめ候はゞ、孰れか敢て王師に抗し可申や、遷都の地を江戸に定めらる、の大英斷有之、鳳輦東下の大令一下せば、忽ち關東奥羽の山壑は霜雪を消融して春風和氣を發すべく、群生歡呼、萬歲聲裡に鳳輦を迎へ奉る準備に取掛可申候。即ち是先生の所謂天下悚動する所の大基礎を建て、皇威を海の内外に輝すものにして、且東北萬生の苦難を按撫し、併せて維新の治を速ならしむるの善政大策と奉存候。今の時に方りて、江戸遷都の議を建る如きは、或は輕學なりとの非難可有之歟。然ども是等は俗論なるのみ。但其俗論を避んと欲せば、暫く其裁定の日を待て遷都すとせば然るべし。遷都は國の大事なり、深慮審議内治外交最良にして、萬世不拔の地を撰擇するは實に肝要と奉存候。而して江戸遷都の事は其裁定の上策に可有之候。

因て尙左に江戸遷都の利有りて、浪華の利無き要項を副陳し、御参照に供候。謹言

明治元年三月十日

江戸寒士 前島 來 輔

副 陳 書

- 一、大政府所在の帝都は帝國中央の地ならんを要す。蓋し蝦夷地を開拓の後は江戸を以て帝國の中央とせん。而して蝦夷地の開拓は急ならざるべからず、且此開拓の事務を管理するは江戸を以て便なりとす。浪華は甚だ便ならず。
- 二、浪華は運輸便利の地と稱す。然れども是れ和形小船の日にして稱するを得べし。今は西戎大艦の時となる、運輸の便とは之を容れ及び之を修理するの便有る地を謂ふなり。而して浪華は之を容るべき安全港を築造し難し、又修繕の便無し。之に反して江戸の海たる、已築の砲臺を利用して容易に安全港を造り得べく、以て大艦巨舶を繋ぐべし。又横須賀は近きに在り、修の工も容易なり。
- 三、浪華は市外、四通の道路狹隘にして、郊野宏大ならず、將來の大帝都を置くべき地にあらず。江戸の地たる八達の道路は廣濶にして、四顧の雲山曠遠なり。地勢の豪壯なる、風景の雄大なる實に大都を建置するに最適の地なり。
- 四、浪華の市街は狭少にして、軍馬驅逐の用に適せず。王公又は軍隊の往來織るが如きを容るべき設に非ざるなり。之を改築せんか經費の大なる、民役の多き測るべからず。江戸の市街は彼に異なり、一の工事を起す無くして可なりとす。
- 五、浪華に遷さば宮闕、官衙、第邸、學校等皆新築を爲さるべからず。江戸に在りては官衙備り學校大なり。諸侯の藩邸、有司の第宅、一工を興さず皆是れ已に具足せり。宮闕の如きも目下特に新築を爲さるも、少しく修築を江戸城に施さば以て充るに足るべきならんか。今の時に際しては國費民役最も慎慮を要せざるべからず。

六、浪華は帝都とならざるも何等の衰頹を憂る事無く、依然本邦の大市なり。江戸は帝都と爲らざれば市民四方に離散して寥々東海の寒市とならん。江戸は世界の大都に列す。此大都を以て荒涼弔古の一寒市となす、甚だ痛惜に勝へざるなり。幸に帝都を茲に遷さば、内は百萬の市民を安堵し、外は世界の大都を保存し、皇謨の偉大を表示す。國際上及び經濟上の觀察に於て、是亦輕々に附すべき問按に非ざるなり。

外交奉行の狼狽と失態

維新政府の最も困難を感じたのは、末蓮の幕府の置土産なる外交の處理であつたが、私は今こゝに多く語る餘白を有さない。唯だ爰に前島男より聽く一事を語る。明治元年一月には男は兵庫の奉行所に出仕してゐたのである。新政府が成立したと云ふても、外國に對しては奉行は後任の定まるまで其職に在るべきであるのに、新政府の事は吾れ聞せず焉と、急に一月九日神戸を引揚げたことは、其屬僚であつた前島をして憤慨の極萬行の熱涙を灑がしめた。當時幕吏が外交に對し如何に無識無責任であつたか、左の談話によつて窺はる。

前島翁をして、熱涙萬行を禁じ得ざらしめた一事は、明治元年一月九日、神戸引拂の時である。同月三日伏見の戦ひ敗れてからは、日々凶報のみ到り、終に慶喜公も海路江戸に歸られたとの報が來た。そこで七日に至り、神戸に在つた兵庫奉行柴田日向守は、英國船を借り、總ての屬僚を具し、急に神戸を引拂ひ江戸に歸ることになり、翁も共に引揚ぐることになつた。夫が爲め八日は朝から其の管掌の税關の諸帳簿や、書類の整理で混雜を極めたる匆忙中、翁は奉行に一の建議をして云はる、には、貴官は總員の引揚を命ぜられたが、政府の官吏残らず退去せば、誰れが外國公使軍艦の將校、其他の外人に應接するであらう。(此時英、佛、米、蘭の軍艦特に英艦は數艘碇泊中であつて英公使バ

ルクス氏も大阪より引取り軍艦にあつたのである)之に應接するものが無いとなれば、彼等は必定兵を上陸せしめて居留地を守備するに相違ない。居留地のみならず、東は生田川西は須磨邊に兵を出して守備區域となさんも圖られず。即ち此一區域を彼等の占領に委すること實に國の體面上由々しき大事である。既に將軍は大政を返上されたにもせよ、朝廷より此地を管理する官吏を派し其更迭授受の事終らぬ間は、兵庫奉行は日本政府の職權を行ふものである。此場合奉行の去らる、は早計であらう、事情已むを得ず退去を要すとならば、必ず數名の官吏を留め置かれ、外人と應接折衝に備へ、徐ろに朝廷の官吏の來るを待たるべし。自分不肖なれども若し若干名の吏員を附屬せしめられれば止まつて其衝に當らん、若し附屬吏員を留置くこと叶はずとあらば、切めては拙者一人にても留置かれよ、拙者は奉行の名代として折衝に當らんと提議したが、其言終に行はれず、奉行は匆皇一同を率ゐて夕刻乗船した。奉行乗船と共に自分が豫期した通り、果して英國軍艦は兵士を上陸せしめ、税關の沿岸に旗竿を立て、之に五箇國の國旗を掲揚した。自分は之を見て、そらくそと歎息し熱涙萬行眞に禁じ兼ねたとは、翁が往年を追憶しての憤慨談である。(此一項私の編した前島翁の傳鴻爪痕より摘録す)

右は一地方の事に屬すれども、兵庫は外交の要樞であるから、特に摘出したのである。

信教に就ての新政府の措置

維新政府はあらゆる舊慣を打破して何事も神武の古へに復するの主義を取つた。舊弊を一掃するにこれも一時の權略であつたであらうが、随分抱腹絶倒の措置も多かつたのである。其の一例としてこゝに聊か言ふて見たいと思ふのは、宗教に對する政府の措置であつた。既に神武の舊に復するの主義を取つたから、神祇省などを置き、神官を偏重して各

宗の佛教を全く排却し去り、神佛混淆を禁じたり、寺を以つて神道を行ふ所に充てたりした。之れが爲めに越前あたり
に眞宗の信徒の騒動が起つたり、外國から耶蘇教に就ての抗議が起つたりした。僧侶は如何にも臍甲斐なく、神官の爲
すことを行はしめられても別に反抗もし得無つた。神官は一時得意であつたが、政府も後に措置の暴を覺つて、神官に
厚くすることも止んだが、一時排佛の爲めに多くの佛像は焼かれたり、棄られたりして、全く糞土のごとく取扱はれた
ので、あたら名作の佛像を失つたことも少なくない。東西本願寺や比叡山の名刹まで滅されようとしたが、大隈侯によ
つて辛ふじて助かることが出来た。維新政府は大功を樹たに相違はないが、宗教に對しては可なりに罪を作つたのであ
る。近年南條文雄氏の著はした懷舊録に此の混亂時代の實況をよく寫してゐるが、一讀噴飯に堪へないものがある。

明治六年の記事の中に云く、法主は七月まで東京に滞留された。その間は毎日教部省と大教院の事務所眞宗教務院
と後に改稱した眞宗局へ往來された。毎日といつても、この三ヶ所へ順次に出頭せられたのである。その大教院は芝
の増上寺に在つた。大教院祭典の遣り方といふのは今から考へると實に噴飯に價ひするものであつた。神佛混淆がい
けないと言ひ乍ら自身が先立つて神佛混淆を獎勵してゐるやうなものであつた。と言ふのは佛教の僧侶を集めて、祝
詞を教へたり柏手の打ち方を教へたりしてゐたからである。私達も一日神道の稽古をした。それは祖宗の祭典をする
にはお経ではいけない。僧侶と雖も須く祝詞によつてやるべしといふやうなことから、その讀みあけ法を習つたり、
ボンボンと八返手を打つてどうかするといふかしは、での打ち方を稽古したりした。又、饌具の稽古といつては、増
上寺の大本堂を突つ切つた向に在る神殿の間へ、白木の三寶へ載せた鏡餅を目八分に捧けて行つたり來たりして、管
長が橋を渡つて行かれた事もあつた。

この時代のことを後で考へて見ると、一とつても理窟に合つたことがない。革命史には不合理と亂暴は付物である。併

しそれは後代の者が讀んで感ずること、革命史中の人物は決して不合理とも亂暴とも思つてやつたことではない。
恰度そんなわけで、芝の増上寺を充てた大教院で法主殿如上人が大きな鏡餅を捧けて神前に進まれる姿を見ても大し
た滑稽には感じなかつた。法主は體格のいゝ人であつた。それに士農工商さまゝな者から上る他宗の管長と違つて
門跡といふ貫録を以て生れてゐるから、几帳面に構へた姿は却々立派なものであつた。それを下役同志の下馬評など
で「イヤ天晴れなものだ」なんと言はれると自分の鼻が高くなつたやうに得意がつたものだ。

増上寺の奥の院に祭つた本尊といふのは四柱の神であつた。即ち天御中主神、高皇產靈神、神皇產靈神、天照皇大
神の四柱である。その前で衣冠束帯或は素袍水干の神職に就いて紫衣金襴の高僧達が進退を習ふ、それも鏡餅くら
ゐるならい、が、尾頭附の生魚などを佛袈裟の身が恭しく捧げるに至つては可笑しさも通り越してしまふ。

教部局の長官は卿といはずに大輔といつた。教部大輔は穴戸璣といふ人であつた。福岡孝悌といふ人が教部少輔で
布告や令達等はみなこの二人の名で出された。八釜しい三ヶ條の教憲といふのが發布されたのは同年の四月で、それ
は次のやうなものであつた。

第一條 敬神、愛國の旨體すべき事

第二條 天理、人道を明にすべき事

第三條 皇上を奉戴し、朝旨を遵守せしむべき事

後ではこれを三條の教則といつて、これをうまく説きこなしした者を教導職にするといふことになつた。それで諸國
の僧侶を大教院に集めて試験の説教をさせて見るが、全然佛教に關係のない三ヶ條である上に少しでも佛教の教義を
混ぜたら落第になるので甚だ難題である。なんせ根本から佛教で固まつてる者に佛教の教理を入れずに説教をやれと

は思ひ切つた無理を言つたものだ。併し真宗の者は幼少から説教をやりつけてゐるので却々上手に急所を外つて通る。その中でたゞ一人、松山善明といふ人だけは真宗の教義を取入れて説いたことがあるが、説き方があんまりうまいので、一同すつかり感心してしまつたといふことがあつた。

こんな具合で、當時の説教と言へば皆三條の敷衍で、二三特異な例の外は眞つ向に宗義を宣傳するものなどは一人もなかつた。法主も大教院に通ふ合間々々には、諸方の末寺で説教をされることがあつたが、その説教も矢張り三條の教則の外へ出ないものであつた。

右は南條博士の追懐談であるが、革命當時書生あがりの政治家達の施設には随分噴飯すべきことが多かつた。右のごときはほんの一端を擧ぐるに過ぎないのである。

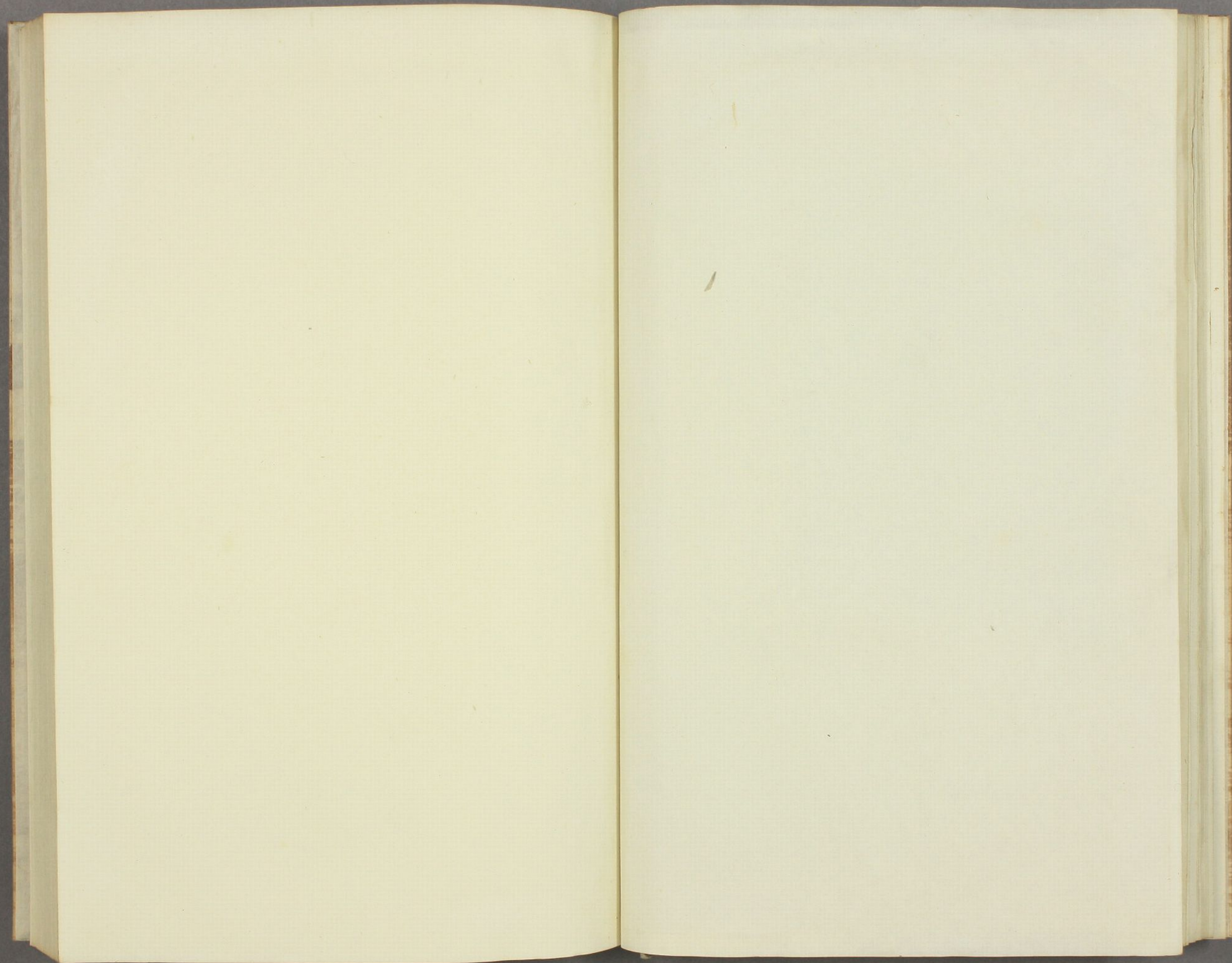
私は先頃「漫談明治初年」といふ書の編纂に與かり、多く歴史に逸してゐるやうな活きた事實を輯めた。今その書の巻頭の序の或る部分を摘録して、私の小話を終ることにする。

何れの國でもその歴史は革命期に於て最も興味がある。革命の歴史は打破の歴史であると共に、又構成の歴史である。變化もあれば波瀾もあり、軋轢もあれば衝突もあり、悲劇もあれば又喜劇もある。明治の維新は長い間の封建制度を打破し、一擧西洋の風に倣はんとした急進運動であつて、既往に類例のない大革命であつた。事が急進であればあるだけ、新舊の軋轢衝突も甚しく、内亂や暗殺が暮りに起り、大勢の定まるまでには、多くの悲劇が演ぜられた。戀舊派は大勢に抗し得ず多く亡びたが、新しきを喜ぶものは、西洋の模倣に汲々としたけれども、其模倣は未熟であつた。餘りに舊物打破に急であつた爲めに、存すべきものをも打破して噬臍の悔もあつた。百般の變改、制度文物から風俗に至るまで、何も彼も面目を一新せんとする大革命の混雜は何れの革命にもあることとは云へ、異系の文化を

輸入することであつたから、其混雜は一層甚しかつた。取り入れた新文化は直ちに咀嚼されず、舊物と併せ行ふ場合には木に竹を接ぐの趣があり、新舊の融和するまでには滑稽百出して頗る奇觀を呈した。これが革命に伴ふ興味ある喜劇とすれば、維新の場合には殊に豊富を覺える。

併し混亂の當時に在つては、如何に抱腹絶倒の滑稽も、之れを演ずる人には眞剣眞面目の沙汰で、勿論自からそれを滑稽と感ぜず、其の空氣の内にある局外者も亦滑稽とは感じない。唯だ漸やく進歩した後の世に較べて見て、始めてをかし味を感じ、滑稽とも思ふのである。之れに依つて史料などいふものは、時を隔て、味はねば、うま味が出ないものであることに氣がつくのである。

明治維新は斯くの如く大興味があるは勿論、亦頗る興味もあるが、奈何せん短篇では其萬一を髣髴することすら出来ない。況して昭和の戊辰と比較し一論を立てることは極めて大切であるけれども、それは私の擔當でないから、爰に筆をといめる。



以下全て
白紙

